

東山・下り坂遺跡

～市民いこいの森整備事業に
伴う緊急発掘調査報告書～

1995

塩尻市教育委員会

東山・下り坂遺跡

—長野県塩尻市東山・下り坂
遺跡発掘調査報告書—

1995

長野県塩尻市教育委員会

序

東山・下り坂遺跡は、塩尻市の東南にあたる北小野勝弦地区にあります。この勝弦地区は、縄文早期押型文期の遺跡が数多くあることで全国的にも注目されている地域であります。現在では標高約900mの高原地形を利用し、多くの別荘をかかえた避暑地としての役割も担っております。

このような勝弦地区におきまして市民いこいの森整備事業が行われる運びとなり、遺跡の事前調査の必要性から今回の発掘調査となりました。発掘調査は市教育委員会によって平成6年7月から10月にわたり行われました。

調査の結果、東山遺跡からは縄文時代前期の土坑をはじめとして、集水遺構や土坑群が見つかり、下り坂遺跡からは大型の竈を有する平安時代の住居跡1軒が発見されました。また、勝弦地区では初めて旧石器時代の遺物としてナイフ形石器が出土しております。

これらの調査の結果、得ることができました多くの資料が今後有効に活用され、勝弦地区をはじめとして広く地域歴史の解明に役立つことを期待しております。

このように今回の調査が無事終了いたしましたのも、発掘調査に多大なるご理解、ご尽力を賜りました地元関係者の方々ならびに献身的努力を惜しまず作業に従事していただきました発掘参加の皆様方のご協力の賜であり、深甚の謝意を表するものであります。

平成7年3月

塩尻市教育委員会

教育長 平出友伯

例 言

1. この報告書は、平成6年度市民いこいの森整備事業に伴い、塩尻市大字北小野勝弦地区に所在する東山遺跡と下り坂遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、東山遺跡において平成6年7月20日～8月30日まで、下り坂遺跡においては平成6年8月19日～10月28日にかけてそれぞれ行われた。
3. 本書の作成にあたり、作業の分担は次のとおりである。
遺構——整理・トレース：小松
遺物——水洗：一ノ瀬、大和、古厩
注記：一ノ瀬、古厩
復元：市川、一ノ瀬、古厩
実測：一ノ瀬、小口、小松、古厩
拓本：一ノ瀬、小林、古厩
トレース：小口、小松
図版組——小松
写真——小口、小松
4. 本書の執筆は、第V章を小林が行い、その他は小松が行った。
5. 本書の編集は小松が行った。
6. 本文記載の平安時代の遺物年代に関しては『中央自動車道長野線埋蔵文化財報告書』4に準じた。
7. 調査および本書作成にあたり下記の方々に御教示、助言を賜った。
青木正洋、神村透、倉科明正、新谷和孝、千葉剛成、樋口昇一
8. 本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目 次

序	
例 言	
第I章 調査状況	
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過	2
第4節 調査の状況と面積	6
第II章 遺跡の立地と歴史的環境	
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第III章 東山遺跡の調査	
第1節 調査の概要	10
第2節 検出遺構	
1. 集水遺構	13
2. 土坑	15
第3節 出土遺物	24
第IV章 下り坂遺跡の調査	
第1節 調査の概要	25
第2節 基本層序	27
第3節 検出遺構	
1. 竪穴住居跡	29
2. 土坑	30
第4節 出土遺物	
1. 旧石器時代	32
2. 縄文時代	32
3. 平安時代	35
第V章 考古学から見た勝弦地区	38
第VI章 ま と め	52
写 真 図 版	

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	7
第2図	勝弦地区遺跡分布図	9
第3図	東山遺跡位置図	10
第4図	東山遺跡遺構全体図	11
第5図	東山遺跡トレンチ配置図	12
第6図	集水遺構図(1)	13
第7図	集水遺構図(2)	14
第8図	土坑実測図(1)	15
第9図	土坑実測図(2)	16
第10図	土坑実測図(3)	17
第11図	土坑実測図(4)	18
第12図	土坑実測図(5)	19
第13図	土坑実測図(6)	20
第14図	土坑実測図(7)	21
第15図	土坑実測図(8)	22
第16図	土坑実測図(9)	23
第17図	東山遺跡出土遺物	24
第18図	下り坂遺跡位置図	25
第19図	下り坂遺跡遺構全体図	26
第20図	下り坂遺跡基本層序(調査区東面)	27
第21図	焼石および焼土分布状況	28
第22図	第1号住居跡実測図	29
第23図	カマド平面および断面図	30
第24図	カマド完掘図	30
第25図	土坑実測図(1)	31
第26図	土坑実測図(2)	32
第27図	ナイフ形石器	32
第28図	下り坂遺跡出土土器(1)	33
第29図	下り坂遺跡出土土器(2)	34
第30図	第1号住居跡出土遺物	35
第31図	遺構外出土遺物	36
第32図	遺跡分布図(1)	38
第33図	樋沢遺跡	39

第34図	樋沢遺跡出土土器	40
第35図	樋沢遺跡出土石器	41
第36図	勝弦地区出土土器	44
第37図	青木平遺跡出土土器(1)	45
第38図	青木平遺跡出土土器(2)	46
第39図	石塚遺跡出土土器(1)	47
第40図	石塚遺跡出土土器(2)	48
第41図	遺跡分布図(2)	50

表 目 次

第1表	発掘調査経過表	6
第2表	勝弦の遺跡一覧表	8
第3表	東山遺跡遺物観察表	24
第4表	下り坂遺跡遺物観察表(1)	34
第5表	下り坂遺跡遺物観察表(2)	35
第6表	下り坂遺跡遺物観察表(3)	37

第I章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

平成5年12月10日	市観光課、市教育委員会により現地視察
平成6年7月8日	市観光課、市教育委員会により現地協議
7月12日	東山遺跡埋蔵文化財発掘調査について（提出）
7月12日	下り坂遺跡埋蔵文化財発掘調査について（提出）
7月14日	東山遺跡発掘調査について（通知）
7月14日	下り坂遺跡発掘調査について（通知）
	東山遺跡発掘調査終了について（届）
	東山遺跡埋蔵文化財の拾得について（届）
	下り坂遺跡発掘調査終了について（届）
	下り坂遺跡埋蔵文化財の拾得について（届）

発掘調査実施計画（一部のみ掲載）

1. 遺跡名：東山遺跡 下り坂遺跡
2. 発掘の目的及び概要：市民いこいの森整備事業に先立ち、1,300㎡以上を発掘調査し記録保存をはかる。遺跡における発掘調査は平成6年10月31日までに終了する。調査報告書は平成7年3月20までに刊行するものとする。
3. 調査日数：発掘作業40日 整理作業35日 合計75日
4. 調査に要する費用：6,500,000円
5. 調査報告書作成部数：300部

第2節 調査体制

(1) 東山遺跡

団 長	平 出 友 伯	（塩尻市教育長）
担 当 者	小 松 学	（長野県考古学会員、市教育委員会）
調 査 員	小 口 達 志	（ ” ” ）
	小 林 康 男	（日本考古学協会員、市教育委員会）
	市 川 二三夫	（長野県考古学会員）
	倉 科 明 正	（日本考古学協会員）

発掘参加者 内川初雄、小沢甲子郎、小泉忠行、小松千元、小松幸美、清水年男、高橋阿や子
高橋鳥億、藤松謙一、山口仲司、由上はるみ

整理参加者 市川英幸、一ノ瀬保美、大和あさ子、大和 廣、古厩馨子

(2) 下り坂遺跡

団 長 平 出 友 伯 (塩尻市教育長)

担 当 者 小 松 学 (長野県考古学会員、市教育委員会)

調 査 員 小 口 達 志 (")

小 林 康 男 (日本考古学協会員、市教育委員会)

市 川 二三夫 (長野県考古学会員)

発掘参加者 内川初雄、小沢甲子郎、小泉忠行、小松千元、小松幸美、清水年男、高橋阿や子
高橋鳥億、山口仲司、由上はるみ

整理参加者 市川英幸、一ノ瀬悟、一ノ瀬保美、大和 廣、小幅幸男、古厩馨子

第3節 調査の経過

1 東山遺跡

7月19日(火)晴 発掘調査に先立ちプレハブの設置、発掘器材の搬入を行う。

7月20日(水)晴 発掘作業の留意点および遺跡の概要の説明を行い、発掘調査を開始する。調査区内に幅1mのトレンチを3本設定し、土の堆積状況および遺物の分布状況の調査を行う。トレンチ設定段階において調査区内には雑草が生い茂っていたため、作業は困難であった。Aトレンチの調査を行い、トレンチ内からは、少量の黒曜石片の出土がみられたが、土器など遺跡の時期決定の要素となる遺物の出土はなかった。

7月21日(木)晴 Aトレンチに直交するBトレンチの調査も開始する。土器などの遺物は僅かながら出土するが、いずれも小破片のため時期の比定はできなかった。

7月22日(金)晴 新たにBトレンチに直交するCトレンチの調査もおこなう。Bトレンチからは縄文前期末と考えられる土器片や脚部欠損の石鏃が出土する。これまでに出土した遺物の取り上げを行い、本日をもってトレンチ調査を終了する。

7月23日～27日までお休み。

7月28日(木)晴 重機を2台使用して調査区内の表土除去作業を行う。観光課、財政課が現場視察に来る。すでにトレンチ調査の時に確認されていたが、調査区北側部分は急激に落ち込む地形となっており、地表から最も深い部分で、1.3mを測る。表土除去段階において現場内からは、流れ込みと思われる無数の礫が散乱するように確認され、その中には最大1.5mにもおよぶ巨大な岩もみられ、手作業では非常に困難な状況であった。

7月29日(金)晴 重機による表土除去作業を行う。作業中に遺物の出土はみられなかった。

7月30日(土)晴 表土除去作業をほぼ終了するが、この作業の期間中において遺物の出土が僅かしかみられず、この先の調査の成果が懸念される状況である。

8月2日(火)晴 重機による作業期間中、作業員さんには休みをとってもらっていたが、本日より作業に復帰してもらい遺構検出作業を開始する。ピットと思われる遺構が約20程度検出

されたが、遺物は黒曜石片が数点出土したにとどまった。

- 8月3日(水)晴 調査区西側において、掘立柱建物跡と考えられる遺構が検出され、この建物跡は重複している模様である。
- 8月4日(木)晴 今年の夏は例年になく雨が少なく、遺構検出面には亀裂が入り、また廃土からは乾燥のため土埃りが舞い上がるという、作業をおこなうには困難な状況であった。このような状況下において、ピットおよび土坑が多数検出され成果はあがりつつあるが、石鏃や打製石斧といった製品は僅少で、遺物も全体的に非常に少ない状況である。
- 8月5日(金)晴 調査区のほぼ半分の検出作業が終了し、現在ピットを中心とした遺構が約200確認されている。
- 8月6日～8日はお休みでした。
- 8月9日(火)晴 調査区全体略図の作成を行う。遺構は調査区西側に集中する傾向が伺える。
- 8月10日(水)晴 遺構検出作業を終了し、遺構の掘り下げを開始する。一部の遺構からは遺物が出土したが、ほとんどの遺構からは遺物は確認されなかった。
- 8月11日(木)晴 ピットの底の土は粘土質の土である場合が多く、現場内の土質は粘土質であることが確認された。また調査区東側に位置する丘陵部分に幅1mのトレンチを設定し、試掘調査を開始する。試掘調査において丘陵には人為的につくられたと考えられる4つの段が確認されたが、使用目的は不明である。
- 8月12日～17日はお盆休みです。
- 8月18日(木)晴 遺構掘り下げを行う。
- 8月19日(金)晴 引き続き遺構掘り下げを行う。
- 8月23日(火)晴 調査が休みであった間に待望の雨が降り、ひび割れが激しかった調査区にも僅かながらも潤いが戻ってきた。そのため土が見易くなり遺構掘り下げ作業も順調に行われた。丘陵部分の試掘調査は丘陵が遺構ではないという結論を提供して終了した。また調査区内に測量のためのレベル基準点となるBMを3箇所設定する。
- 8月24日(水)晴 遺構掘り下げ。
- 8月25日(木)晴 丘陵部分のセクションをとる。遺構掘り下げ作業により、近世のものと考えられる暗渠排水溝跡(俗称 ガニ水道)が検出される。しかしガニ水道内からは時期決定の根拠となるような遺物は出土しない。表採ではあるが押型文土器が確認された。これは樋沢タイプに比定されると思われる。
- 8月26日(金)晴 ガニ水道の検出を行い。水路の底面に石がきれいに敷き詰められていることが確認された。また、部分的ではあるが底面に木を敷いた痕跡を確認することができた。
- 8月27日～29日はお休みです。
- 8月30日(火)晴 半裁のままであった土坑の完掘作業を行い、遺構平面図を作成する。本日で東山遺跡の現場での発掘作業をほぼ終了し、同一開発地内の下り坂遺跡の発掘に移行する。
- 9月6日(火)晴 遺構平面図の作成。
- 9月7日(水)晴 遺構平面図を引き続き作成する。
- 9月8日(木)晴/曇 遺構平面図の作成。

- 10月7日（金）晴 倉科明正先生にガニ水道と考えられていた遺構を見ていただき、排水ではなく逆に集水遺構であることが指摘される。また、遺構の構築時期も近代よりも遡る可能性がでてくる。
- 11月2日（水）晴 空中写真撮影のために調査区内の清掃を行う。
- 11月4日（金）晴 前日の雨の影響が心配されたが、絶交の天候のもとで無事に空撮が行われる。
- 11月17日（木）曇 集水遺構の平面図作成。
- 11月18日（金）曇 時折、雨混じりの不安定な天気で平面図作成に苦慮する。
- 11月25日（金）晴 気温が低く図面がはかどらない。
- 12月21日（水）晴 遺構平面図の作成。

2 下り坂遺跡

- 8月19日（金）晴 調査区内に1×1mの試掘坑を3箇所設け、遺跡内の土層堆積状況の把握を行う。土層中には石などは比較的少なく、良好な黒色土層が残されており地表からローム層までは約80cmの層厚を有している。遺物は灰釉陶器、須恵器、土師器、黒色土器など平安時代に比定される遺物を中心に出土する。また黒色土層に遺物が集中する傾向がみられる。
- 8月24日（水）晴 レベルの原点移動を行い2箇所にBMを設置する。
- 8月31日（水）晴 本格的に発掘調査を開始する。テントの設営に思いの外時間がかかったが、耕作土である厚さ約30cmの表土の除去作業を手作業にて行う。残暑が厳しいうえ、仕事内容も重労働であるため能率はあがらない。
- 9月2日（金）晴 表土剥ぎとともに調査区の周囲の雑草を刈り、廃土置場の確保を行う。表土剥ぎの段階のため遺物量は少ないが、須恵器を中心とした遺物が出土している。
- 9月7日（水）晴 表土除去作業を終了し、黒土層の掘り下げを行ったところ、黒土上層から焼成を受けている石が出土し、部分的に焼土を確認する。
- 9月8日（木）晴／曇 黒土層掘り下げ。
- 9月9日（金）晴 黒土層の掘り下げを行う。遺物は黒土層の上部に比較的集中している傾向がみられる。
- 9月10日～13日はお休みです。
- 9月14日（水）晴 包含層の掘り下げと遺構検出を並行して行い、土坑を2基確認する。
- 9月20日（火）晴 遺構検出作業にて住居跡の一部を確認し1号住居跡とする。また、1住の全容をつかむため、付近の拡張を開始する。
- 9月21日（水）晴 遺構検出作業にて土坑を数基確認するが、遺物の出土は少ない。
- 9月22日（木）曇／雨 遺構検出および調査区拡張作業を行うが1住の全体像の把握はできない。雨のため午後の作業は中止する。
- 9月23日～27日はお休み。
- 9月28日（水）曇／雨 一日中雨が降ったり止んだりといった不安定な天候ながら作業を行い、1住は南北5mの住居跡であることを確認する。

- 9月29日（木）晴 D-5グリッドから黒土土器の皿が出土する。1住の上部から炭化材がまとまって出土し、1住西側の焼石の集中している場所から鉄滓が出土したため、集石が鍛冶関連遺構ではないかと考えられた。
- 9月30日（金）曇／晴 台風26号が上陸したため天候が心配されたが、予定どおり作業を行う。1住掘り下げの結果、上部に貼床があり、その下に異なる住居跡があることが確認された。1住の包含層には炭化物や焼土が非常に多く含まれている。まるで消失住居を彷彿させるようである。
- 10月1日（土）晴 調査区東壁のセクションをとる。表土（耕作土）を含めて7層に分けることができた。また、1住の床面の精査を行い柱穴の検出を行った。
- 10月2日～3日はお休み。
- 10月4日（火）曇 1住の遺構平面図の作成を行う。覆土は暗褐色土層の1層のみであり、10cm前後の厚さを有する。
- 10月5日（水）曇 1住のピットを半裁するが比較的浅いものが多く見られる。
- 10月6日（木）晴 調査区北西部の拡張を継続して行っているが、拡張部から広範囲に焼土が確認されることから、かなりの火が使用されたことが伺える。
- 10月7日（金）晴 倉科明正先生により1住西側の集石遺構はオンドル状遺構ではないかという指摘を受ける。
- 10月8日（土）曇 遺構全体図のレベリングを行う。
- 10月9日～11日はお休み。
- 10月12日（水）晴 調査区拡張作業。
- 10月13日～17日はお休み。
- 10月18日（火）晴 C-1グリッドのローム上層から旧石器時代のナイフ形石器が出土する。
- 10月19日（水）晴 調査区内の土坑の掘り下げを終了する。また、中日、市民タイムスの新聞記者が取材に訪れる。
- 10月20日（木）雨 遺構平面図の作成を行うが、雨のため作業を午前中で中止する。
- 10月21日～24日はお休み。
- 10月25日（火）晴 遺構平面図作成およびローム層掘り下げを行う。
- 10月26日（水）晴 1住の掘り下げを行うが、1住下にあると予想されていたもう1軒の住居跡は結局存在していなかったことが確認された。
- 10月28日（金）曇／雨 1住の貼り床下の調査を行うが、午後になり雨足が強くなったため、作業を途中で中止する。
- 11月 1日（火）晴 旧石器の調査を行っているが成果はあがらない。
- 11月 4日（金）晴 東山遺跡と同時に下り坂遺跡の空中写真撮影を行う。

遺跡の状況と面積

遺跡名	場 所	現況	種 類	全 体 積	事業対 象面積	最低調査 予定面積	調 査 積	発掘経費
東 山	塩尻市大字北小野 勝弦	畑	包蔵地	5,000 ^{m²}	28,000 ^{m²}	1,000 ^{m²}	2,000 ^{m²}	5,000,000 ^円
下り坂	塩尻市大字北小野 勝弦	畑	集落址	1,000 ^{m²}	28,000 ^{m²}	300 ^{m²}	300 ^{m²}	1,500,000 ^円

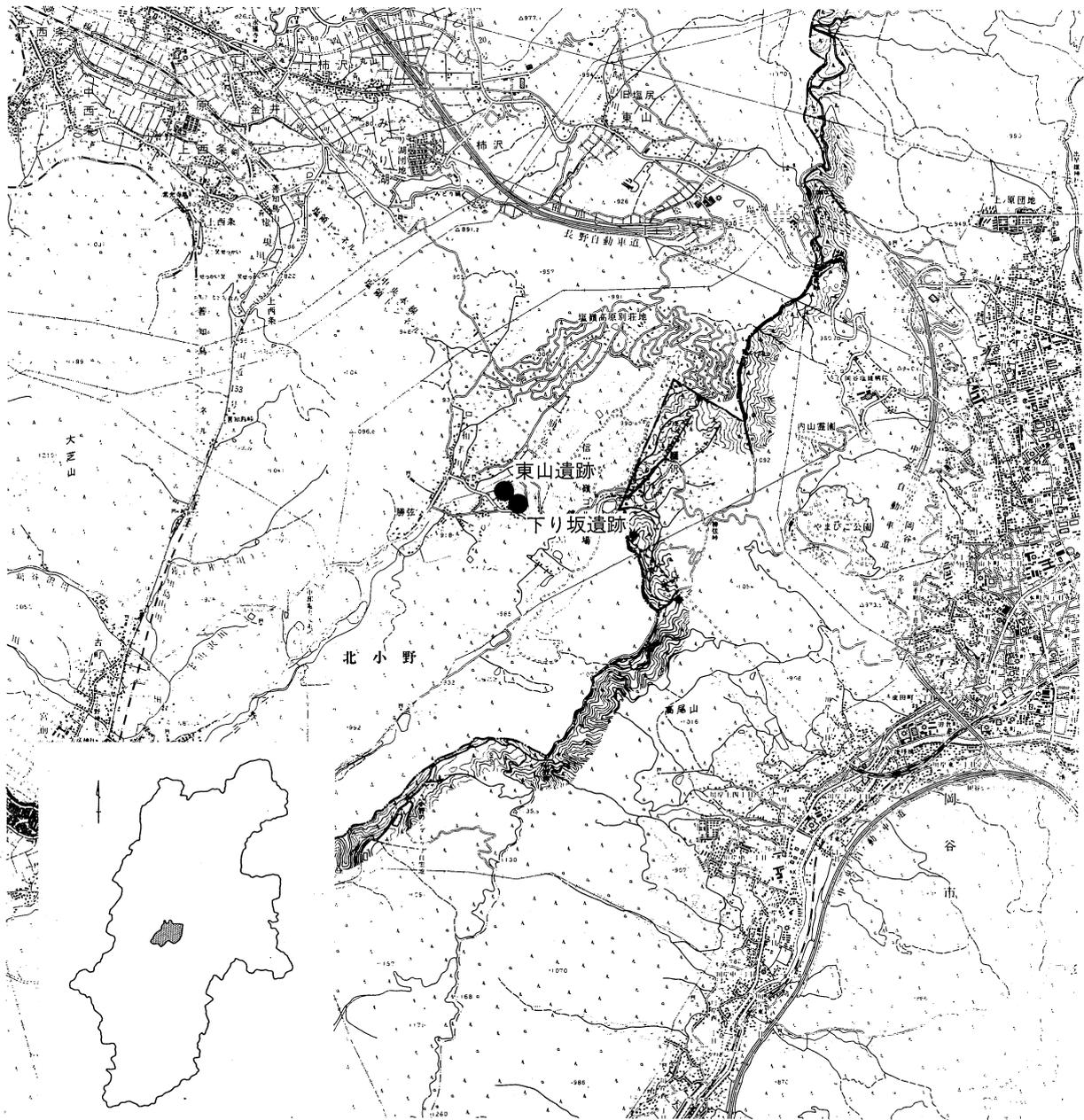
第1表 発掘調査経過表

遺跡名 月	東 山 遺 跡	下り坂遺跡
6	<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; width: 10px; height: 100px; margin-right: 5px;"></div> <div style="text-align: center;"> <p>発掘調査</p> <p>20</p> <p>30</p> <p>遺物整理 図面作成 原稿執筆</p> </div> </div>	<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; width: 10px; height: 100px; margin-right: 5px;"></div> <div style="text-align: center;"> <p>19</p> <p>28</p> <p>発掘調査</p> <p>遺物整理 図面作成 原稿執筆</p> </div> </div>
7		
8		
9		
10		
11		
12 2		
主な遺構	集水遺構2（時期不明） 土坑1基（縄文時代前期） 土坑248基（時期不明）	平安時代 竪穴住居跡1軒 土坑53基
主な遺物	縄文時代 土器（早・前期） 打製石斧 平安時代 土師器	旧石器時代ナイフ形石器1点 縄文時代土器（早・前期） 平安時代 須恵器・土師器・灰釉陶器・黒色土器 鉄鏃・砥石・鉄滓

第II章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 地理的環境

東山・下り坂遺跡は、塩尻市大字北小野勝弦地籍に所在している。北小野地区は善知鳥峠を越え松本平へ、また牛首峠を経て木曾谷に至り東山を越えると諏訪盆地へと通じている。このように北小野は四方を山に囲まれてはいるものの、古来より交通の要衝の地としての役割を果たしていた。このような北小野にあって勝弦地区は標高890m～930mを測る高原状の地形を有している。そのため勝弦は現在多くの別荘を抱え多くの人々に避暑地として利用されている。それを裏付けるように、勝弦の年間平均気温



第1図 遺跡位置図

は8.9℃と低く、塩尻駅付近の年間平均気温が11.4℃であることからみてもその低さがわかる。

また、勝弦は生活に欠かすことができない水にも恵まれており、塩尻市内で唯一の太平洋側流域である小野川の源となっている。小野川のような河川のみならず、勝弦には非常に多くの湧水があり貴重な水資源を提供していたが、この地下水脈は地表から比較的浅い位置にあったため、昭和49年の国鉄塩嶺トンネル掘削以降地下水がトンネル内に異常出水してしまい地下水の湧出量は激減した経過がある。

地質構造的には、糸魚川―静岡構造線上に位置し数条の断層線が走っているが、決して地震の多い地域とは言えない。

第2節 歴史的環境

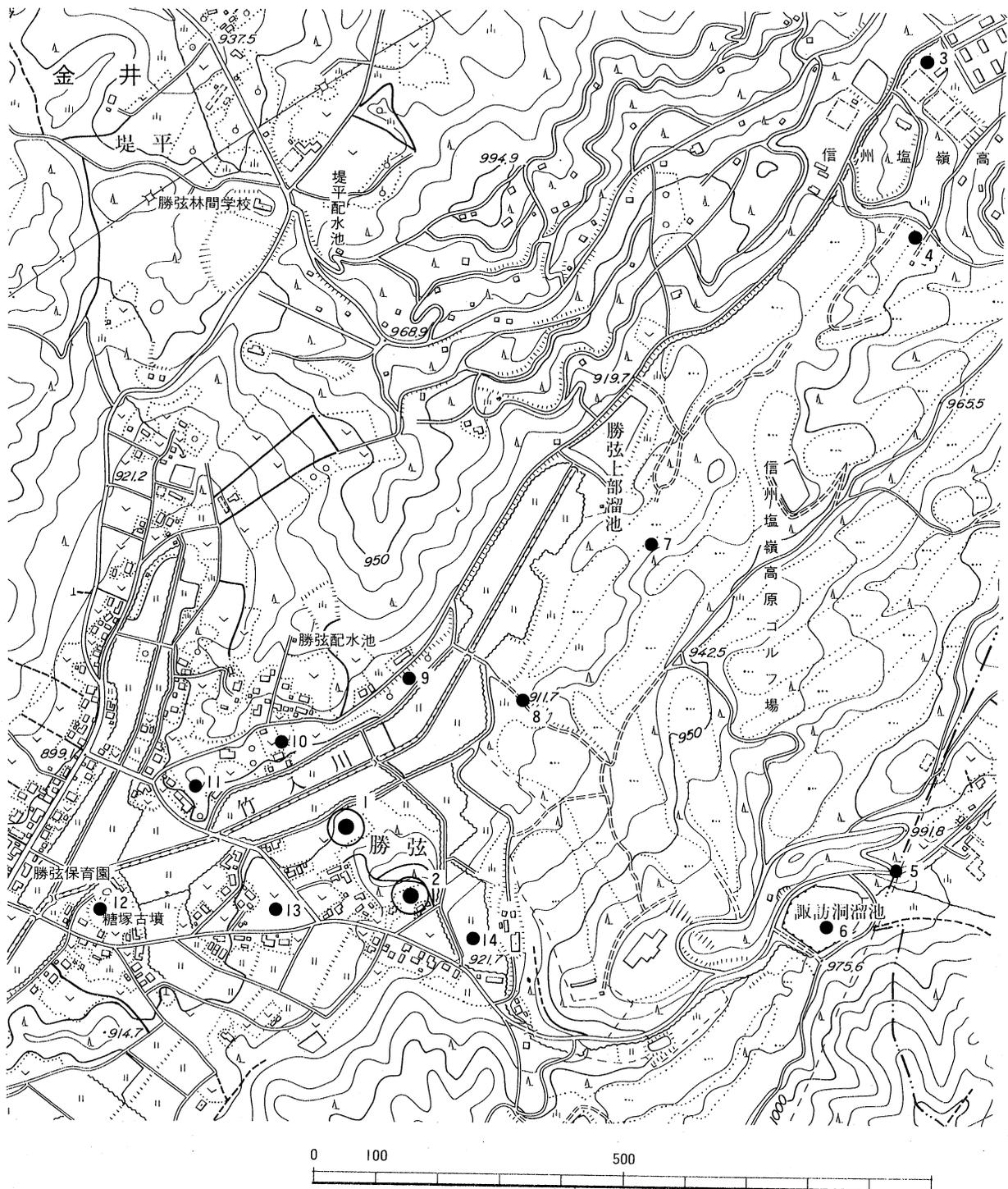
東山・下り坂遺跡が立地する勝弦地区には現在のところ17遺跡が確認されている。勝弦地区において最も古い時代の産物は、今回下り坂遺跡から発見された旧石器時代のナイフ形石器で、他には旧石器時代の遺物は発見されていない。やはり勝弦地区の遺跡の主体となる時期は縄文時代であり、中でも早期押型文期の遺跡が最も多く、ほとんどの遺跡において押型文土器が発見されている。これら遺跡のうち樋沢遺跡と石塚遺跡において発掘調査が行われ、樋沢遺跡では3次にわたって調査が行われ、縄文時代早期押型文期の樋沢式土器の標式遺跡となっている。また、1軒ではあるが押型文期の住居跡も検出されている。押型文期の住居跡は、塩尻市内において現在のところ、4遺跡から合計9軒の住居跡が確認されているに過ぎず、樋沢遺跡から検出された1例も大変貴重な資料といえる。

第2表 勝弦の遺跡一覧表

番号	遺跡名	検出遺構および出土遺物
1	東山遺跡	縄文 土坑 押型文・早期～中期土器・石鏃・打製石斧 平安 土師器 時期不明 集水遺構2・土坑
2	下り坂遺跡	旧石器 ナイフ形石器 縄文 押型文・条痕文・前期土器 平安 竪穴住居1・土坑 土師器・須恵器・灰釉陶器・黒色土器・鉄鏃・鉄滓
3	チキリヤ遺跡	縄文 土器
4	石塚遺跡	縄文 押型文・絡条体圧痕文・茅山下層式・田戸上層式・粕畑式・神ノ木式・曾利式・石鏃・石槍・特殊磨石・石匙・挾状耳飾
5	樋沢遺跡	縄文 早期竪穴住居1・小竪穴1・集石 押型文・捺糸文・無文・沈線文・茅山式・鶴ガ島台式・石鏃・磨石・特殊磨石・磨製石斧・石皿・スクレイパー・楔形石器・石核
6	諏訪洞遺跡	縄文 押型文・茅山式・石匙・スクレイパー
7	十五社平遺跡	縄文 押型文・捺糸文・三戸式・田戸下層式・敲石
8	青木平遺跡	縄文 押型文・捺糸文・鶴ガ島台式・茅山下層式・前期初頭土器・中期中葉～後葉土器・石鏃・石匙
9	秋田荘前遺跡	弥生 土器
10	血下げ原遺跡	縄文 押型文・条痕文・石鏃 平安 土師器・須恵器・灰釉陶器
11	五月ヶ丘遺跡	縄文 押型文・条痕文・石鏃 平安 土師器
12	糠塚遺跡	縄文 押型文・条痕文・捺糸文・中期土器・石鏃・打製石斧・石皿・凹石・特殊磨石・磨製石斧・石匙・石棒 平安 土師器
13	古山遺跡	縄文 押型文・捺糸文・茅山式・関山式・称名寺式・石鏃
14	大畑遺跡	縄文 押型文・捺糸文・中期後葉土器・石鏃 平安 土師器

一方、下り坂遺跡にみられるような平安時代の遺跡は僅少で、数遺跡で遺物が確認されているだけで遺物量も決して多いとはいえない。縄文や平安時代以外では、秋田荘前遺跡から弥生時代の土器が出土しているが、これ以外の遺跡からは発見されていない。

これら勝弦地区の遺跡についての詳細は、第V章に別途記述することにする。



第2図 勝弦地区遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 1: 東山遺跡 | 2: 下り坂遺跡 | 3: チキリヤ遺跡 | 4: 石塚遺跡 | 5: 樋沢遺跡 |
| 6: 諏訪洞遺跡 | 7: 十五社平遺跡 | 8: 青木平遺跡 | 9: 秋田荘前遺跡 | 10: 血下げ原遺跡 |
| 11: 五月ヶ丘遺跡 | 12: 糖塚遺跡 | 13: 古山遺跡 | 14: 大畑遺跡 | |

第Ⅲ章 東山遺跡の調査

第1節 調査の概要

東山遺跡は、塩尻市北小野勝弦地区に所在し、辰野町と岡谷市の境界部分に位置している。背後に塩尻峠や勝弦峠が控え、これらの峠を境にして諏訪盆地側はやや急な斜面を呈している。一方塩尻側は比較的緩やかな斜面となっており、遺跡の立地している周辺は小盆地状の地形を有している。

今回の発掘調査は市民いこいの森整備事業に伴い、市観光課から遺跡の有無の問い合わせがあり、現地調査を行った結果、事業地内に遺跡があることが確認され今回の調査に至った。

調査の結果、縄文早期押型文土器のほか縄文前期に比定される土器などが出土しているが、その出土量は極めて少なく、当初予想していた成果をあげることはできなかった。遺構としては249基の土坑と集水遺構が検出された。土坑に関しては、1基が縄文時代前期後葉に該当するが、それ以外の土坑は遺



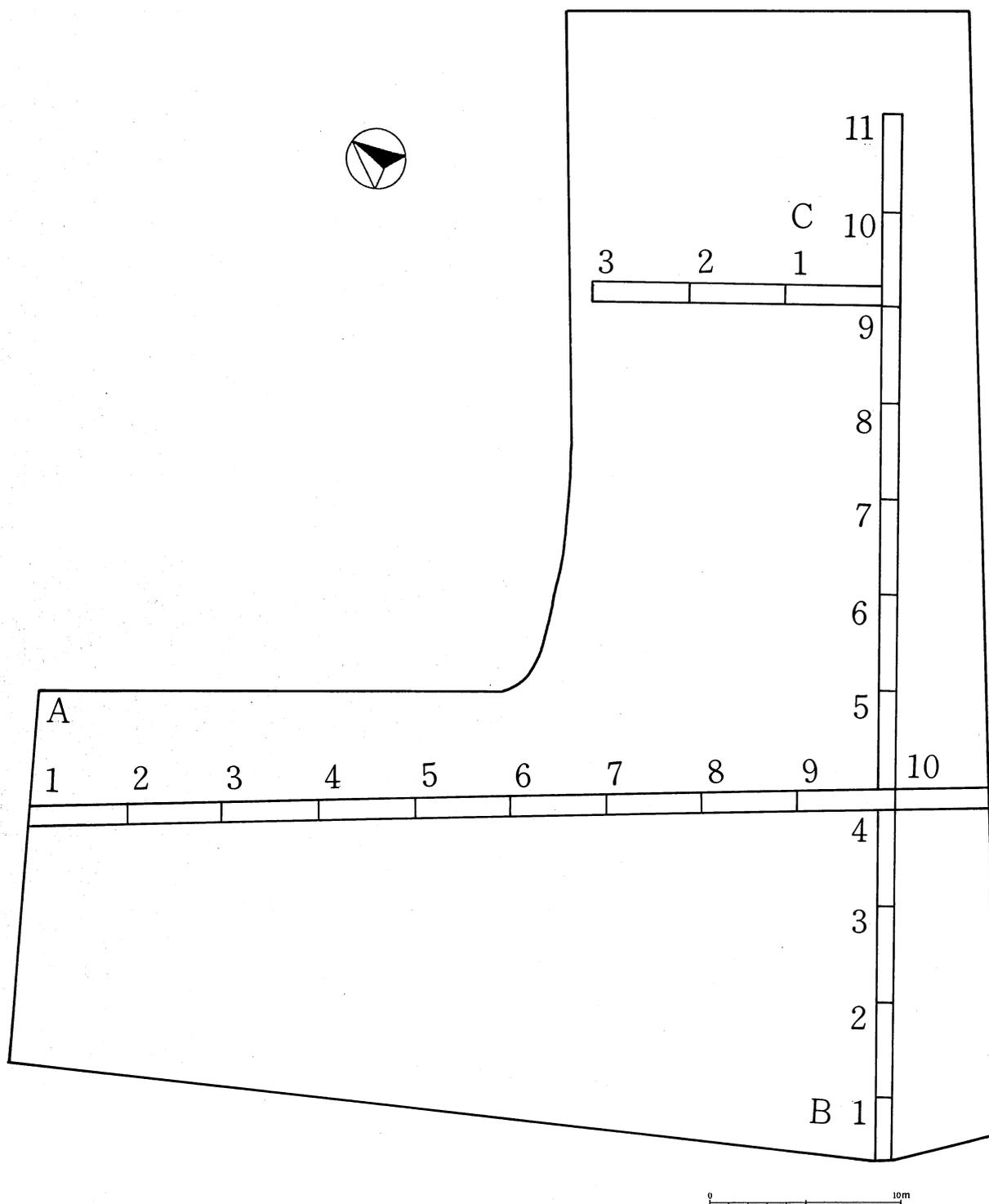
第3図 東山遺跡位置図



第4図 東山遺跡遺構全体図

物の出土がみられなかったため時期が不明である。集水遺構は2基確認されたが、両者の構造には違いが見られ、また部分的にしか調査が為されなかったため遺構の全容を把握することはできなかった。また、遺構が造られた時期も遺物の出土が無いため確定することはできなかった。

調査の方法として、最初にトレンチによる確認調査が行われた。トレンチは1区画を幅1m長さ5mとして設定し、Aトレンチは10区画、Bトレンチは11区画、Cトレンチ3区画の計24区画で試掘調査を行った。表土からローム層までは平均50cmあり、暗褐色土層のみの堆積が確認された。また、土層中には拳大から直径1mまでの礫が混入しており調査は困難を極めた。トレンチ調査の結果、重機により地表から約40cmの表土の除去を行い本格的に調査を行った。



第5図 東山遺跡トレンチ配置図

第2節 検出遺構

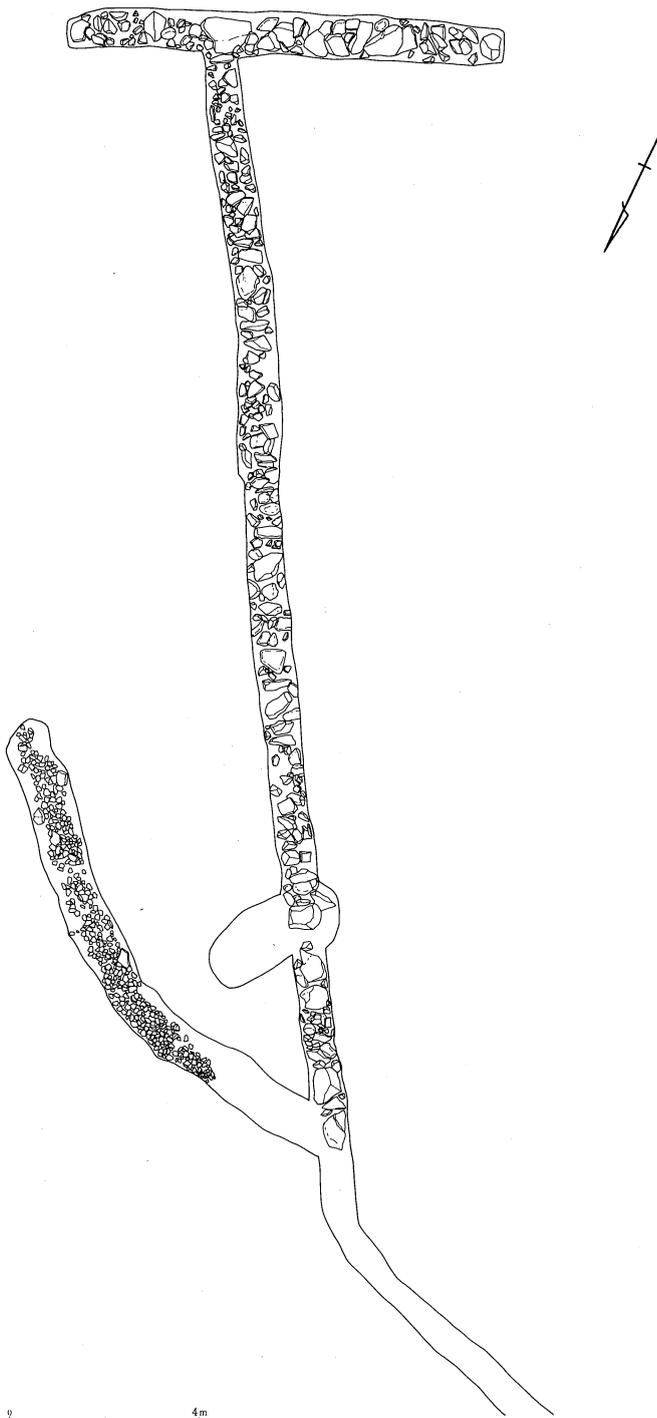
1. 集水遺構

調査区の東側から2基が検出された。集水遺構は、南から北へと流下するように構築されており、2基が並んで位置している。2基のうち西側に位置する集水遺構1は、T字状を呈する溝が主体となり、

遺構が形成されているが、他方からの流入路も1本みられる。遺構上部には長さ4.7、幅0.5mの溝が横位に掘込まれ、溝内には直径30cm前後の石を中心とした比較的大きな石が敷き詰められていた。これらの石の面までローム層上面から約50cmあった。横位の溝から垂下するように掘られた溝は一部屈折がみられるが、調査区内において長さ約22mにわたって延びており、調査区外にも連続していると考えて間違いない。溝の深さは横位に掘られた溝との接点部分では50cm程あるが、その深さは徐々に浅くなり、接点から12mほどの地点では溝に敷かれた石がなくなり深さも10cm前後と浅くなっている。縦に延びる溝に流入するように掘られた溝には、拳大の石が敷かれており、深さも5~10cmと浅い溝で、主体となる溝とは明らかに構造が異なっていた。

一方、東側に位置する集水遺構2は集水遺構1に比べ作りが雑で掘り込みも10~20cmと浅くなっている。溝内に敷かれた石も小型のものが中心で、上部から下部へ下るにしたがって僅かながら大型化する傾向が窺える。

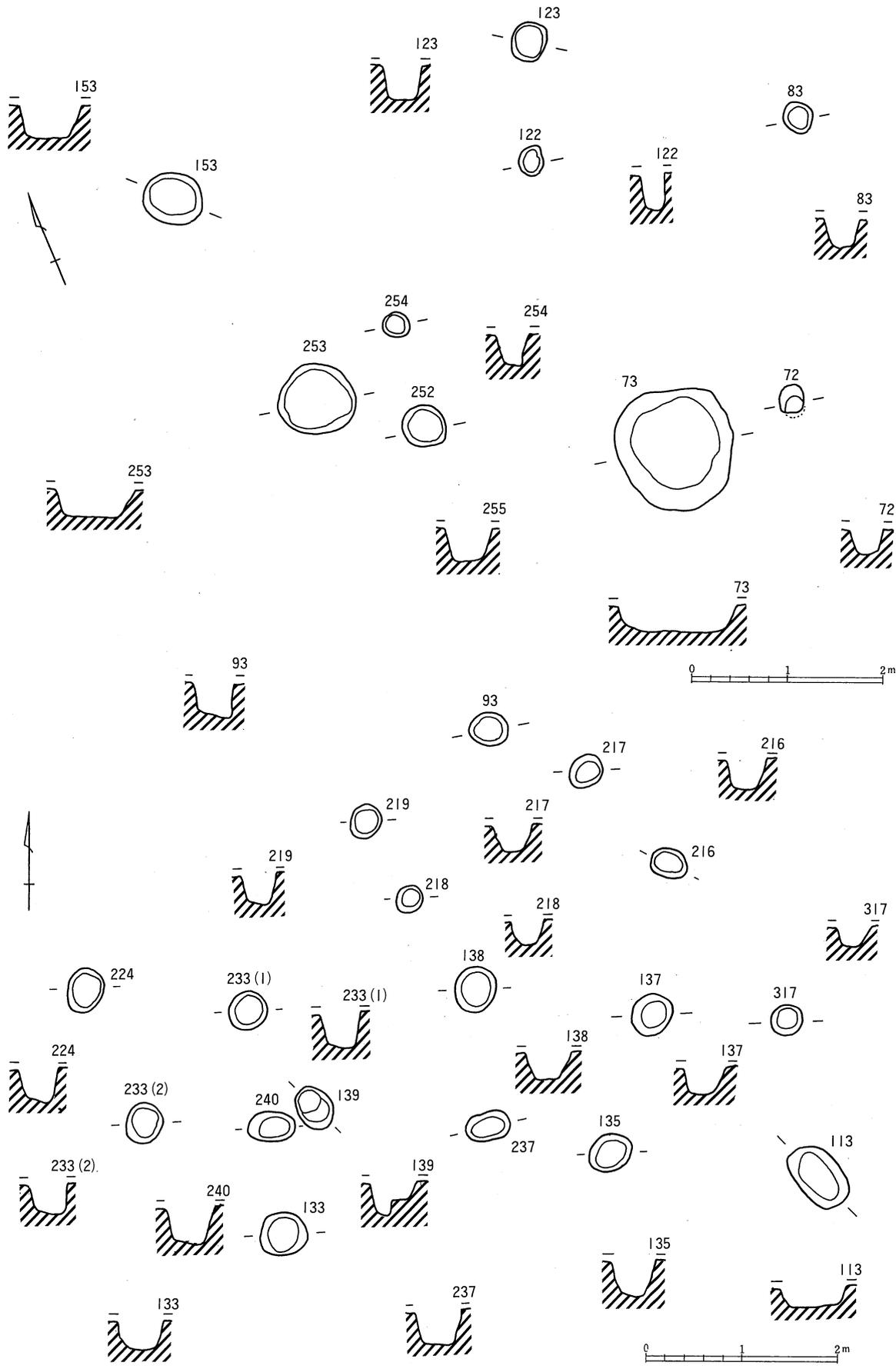
いずれの集水遺構も遺構内からの遺物の出土はなく、時期決定は困難である。



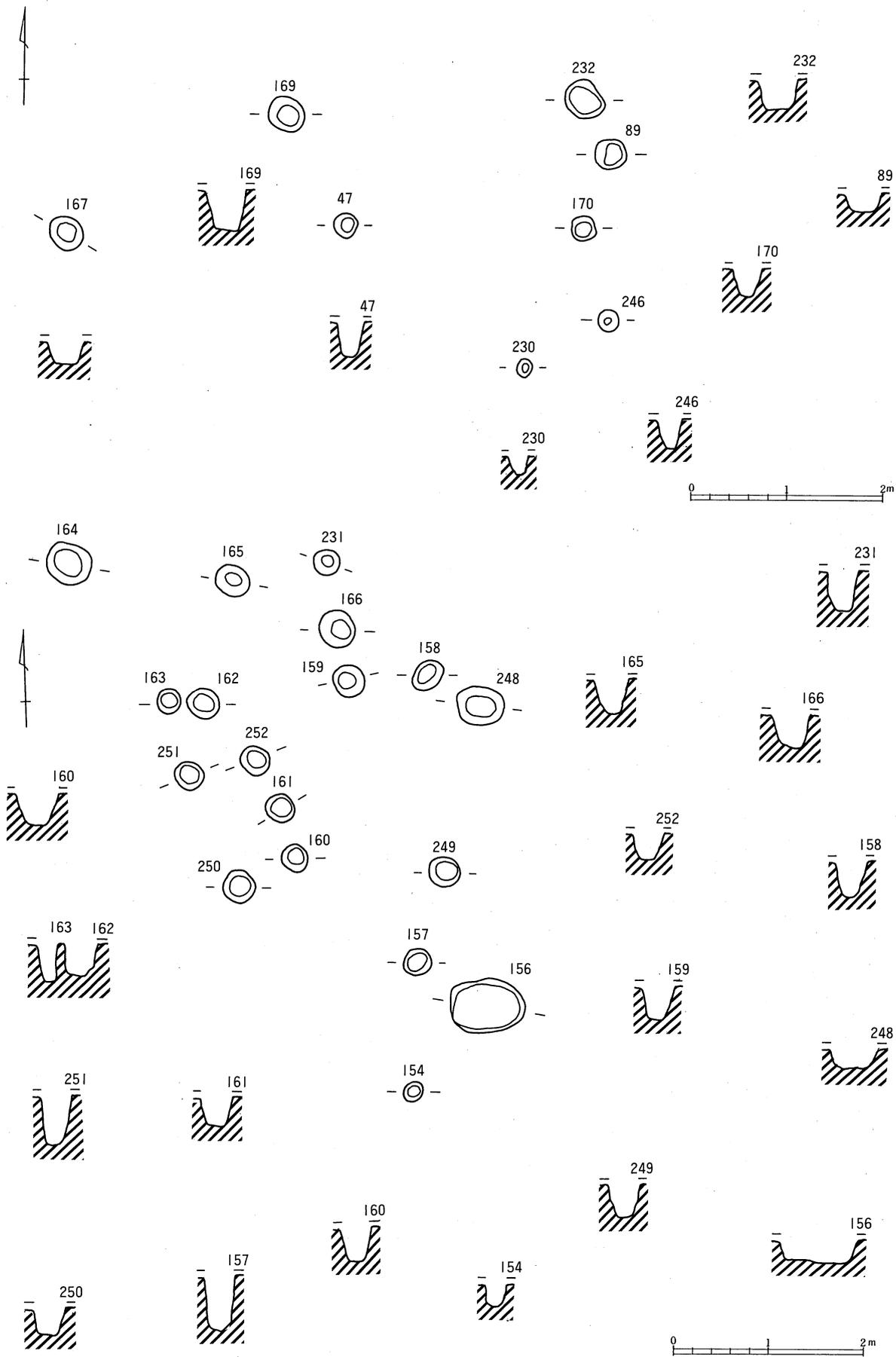
第6図 集水遺構平面図 (I)



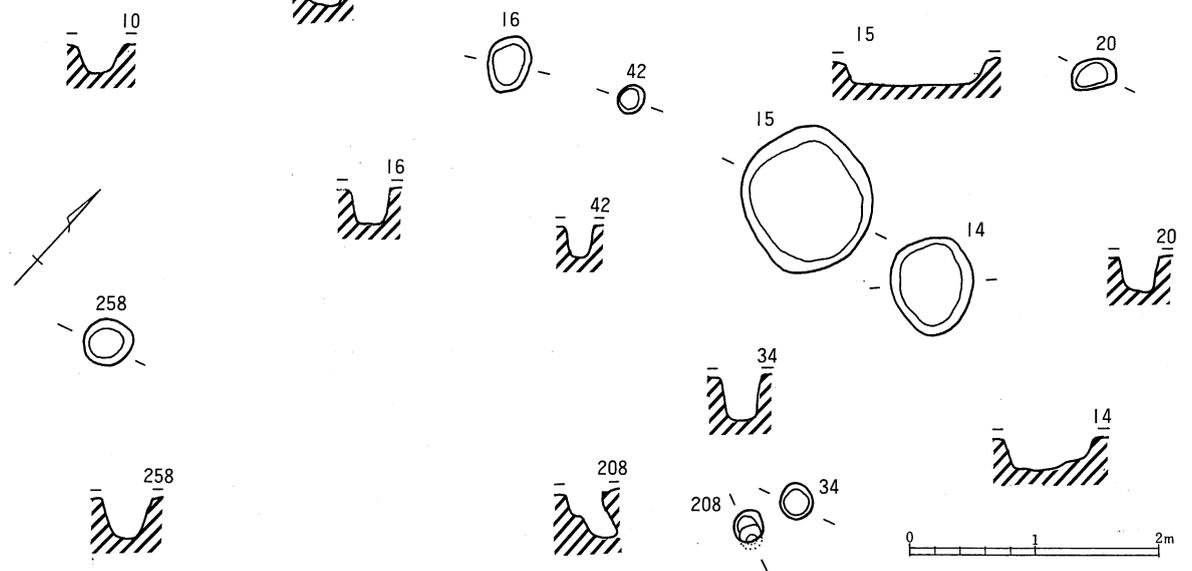
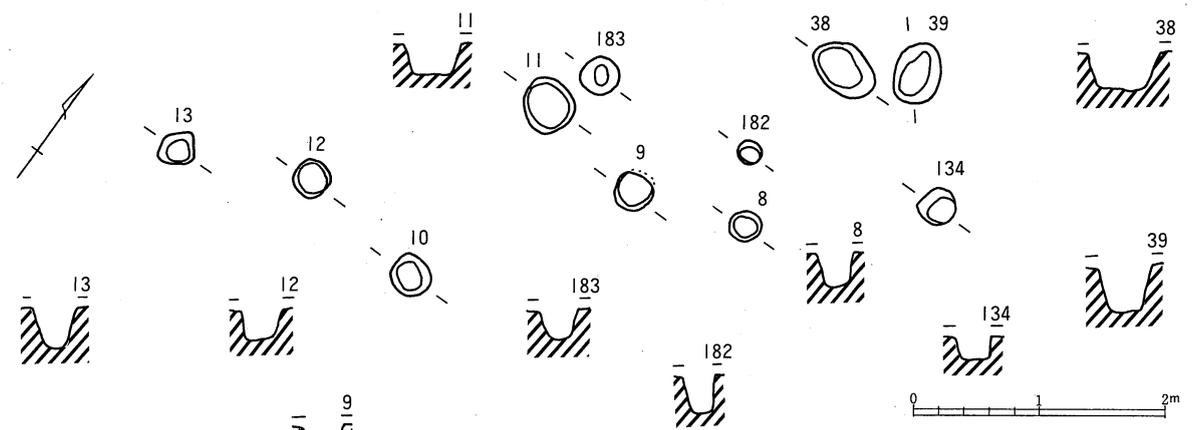
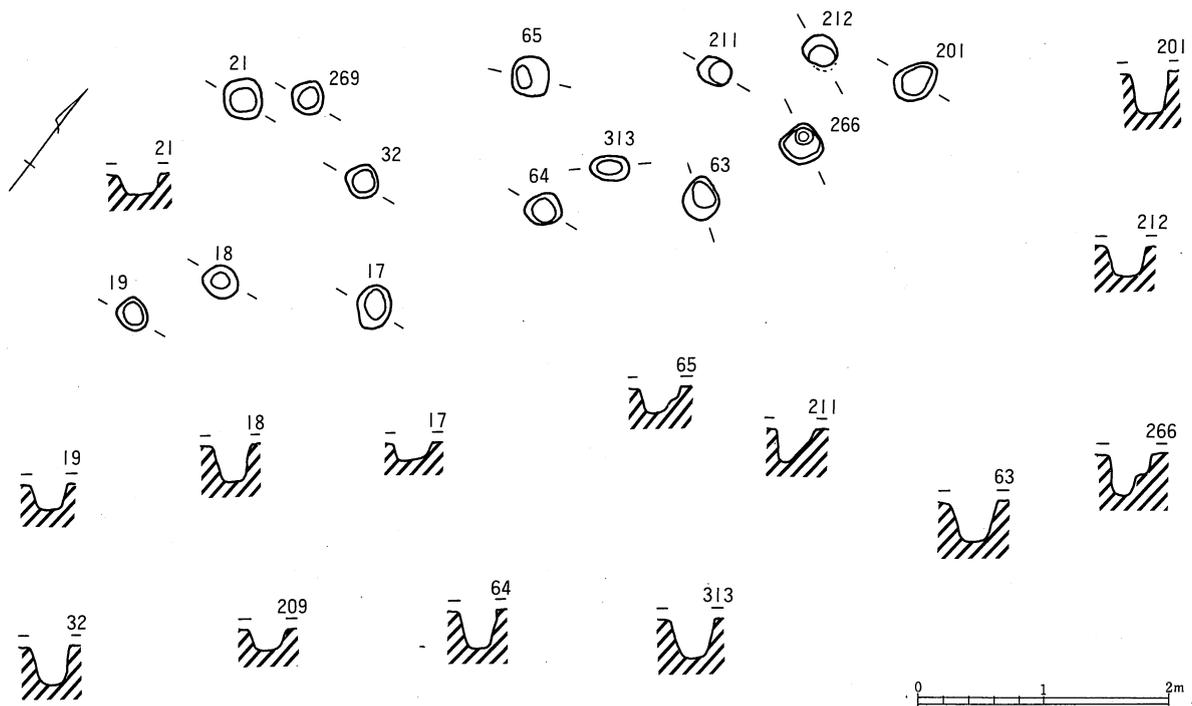
第7図 集水遺構図(2)



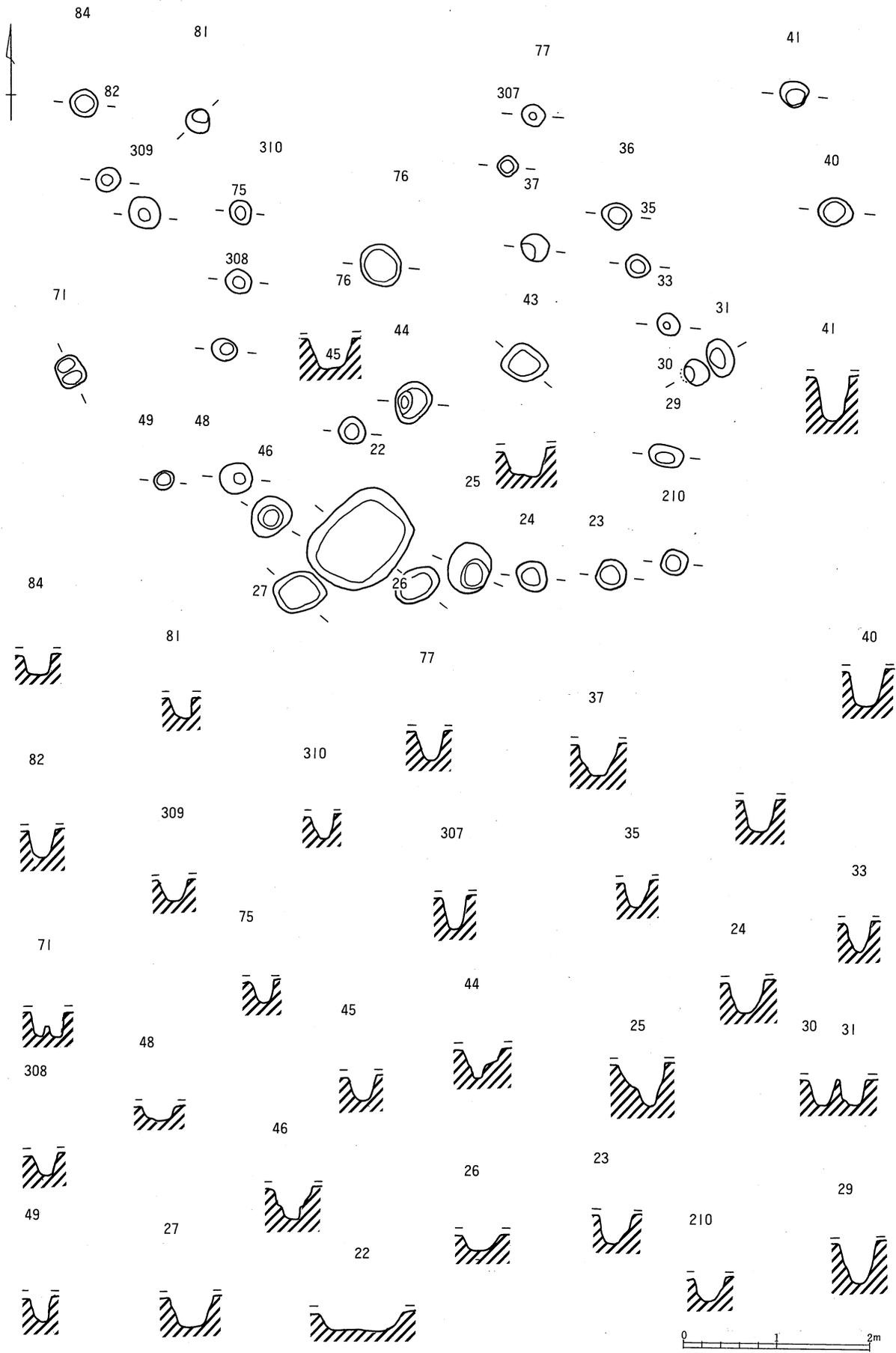
第8图 土坑实测图(I)



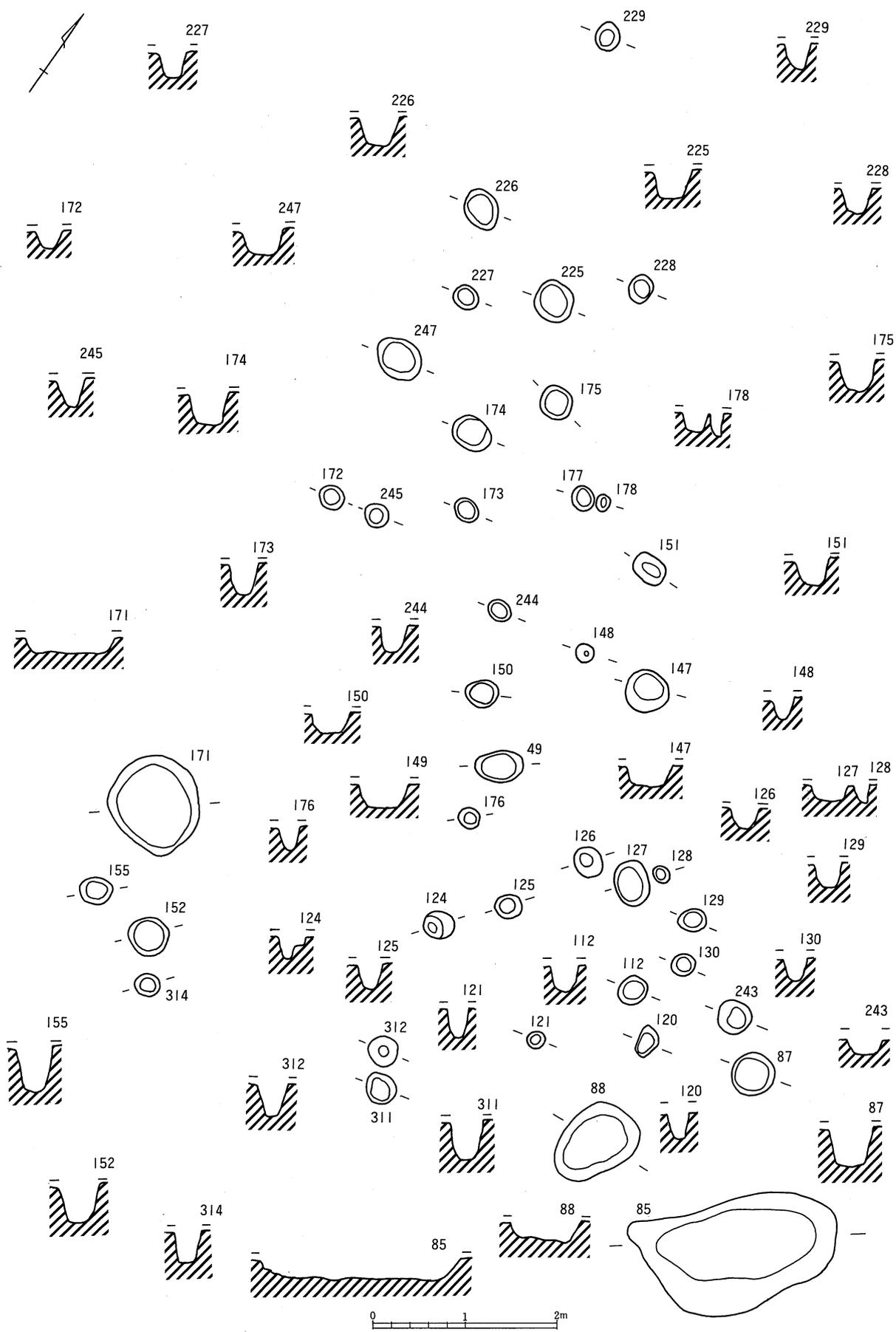
第9图 土坑实测图(2)



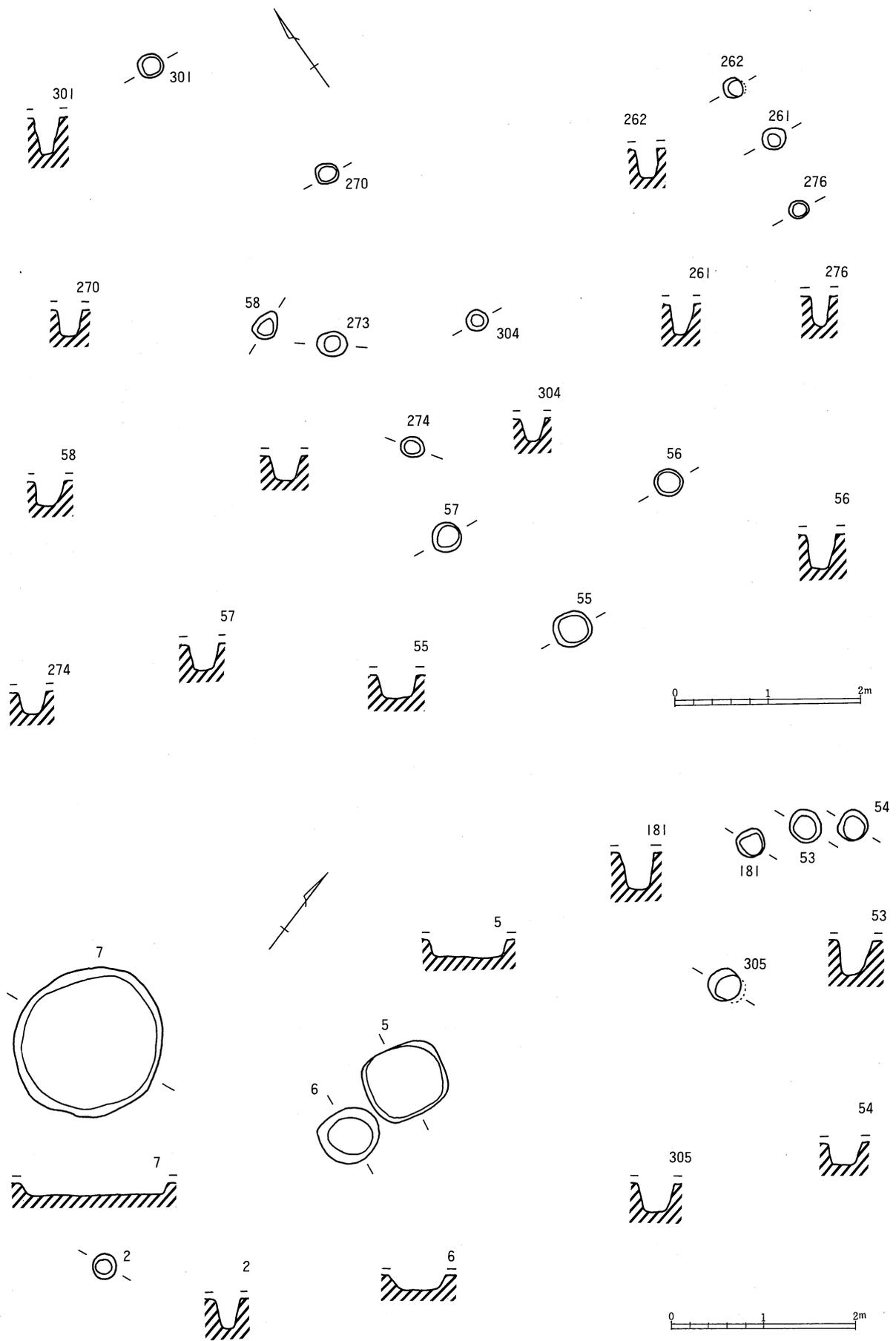
第10图 土坑实测图(3)



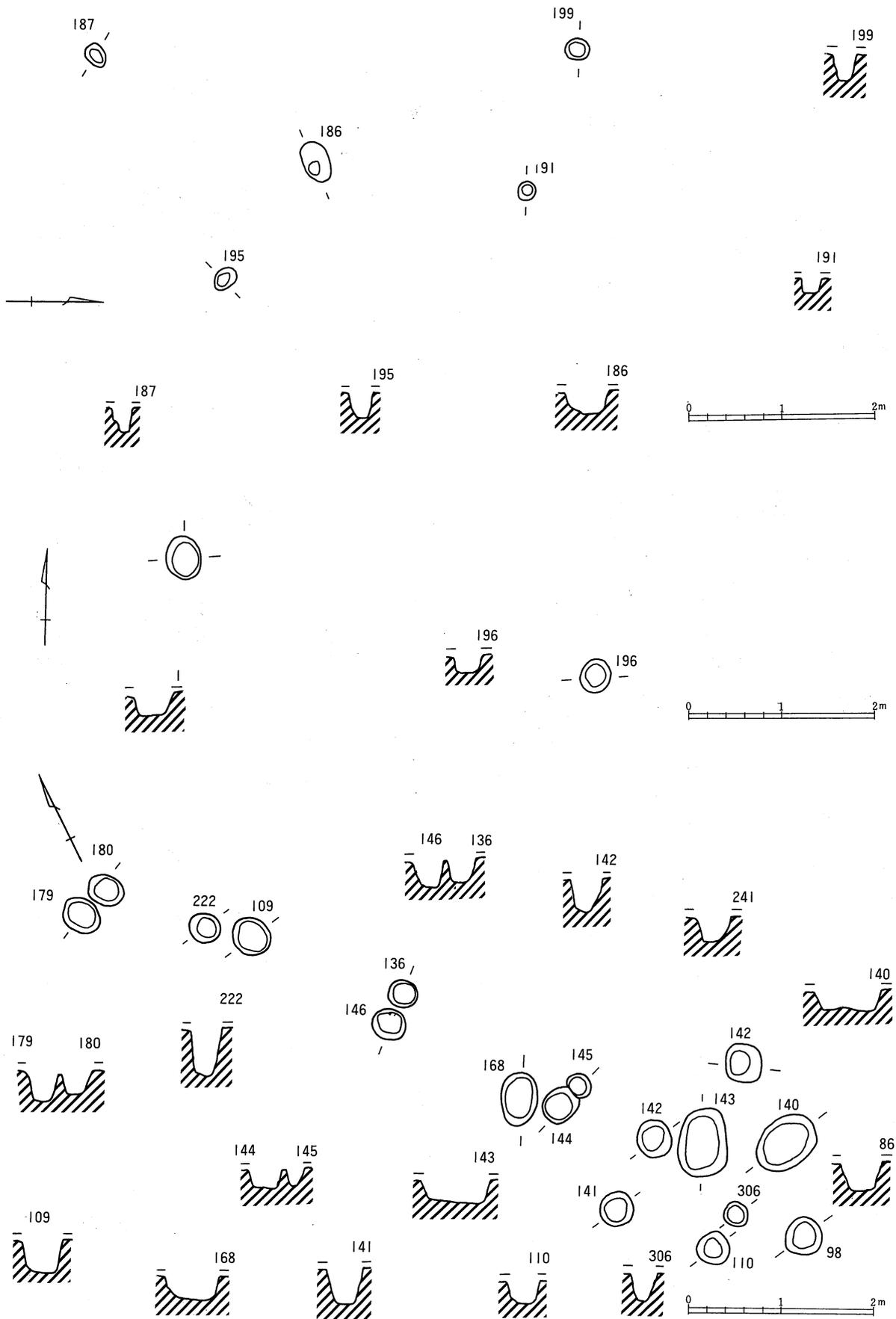
第II图 土坑实测图(4)



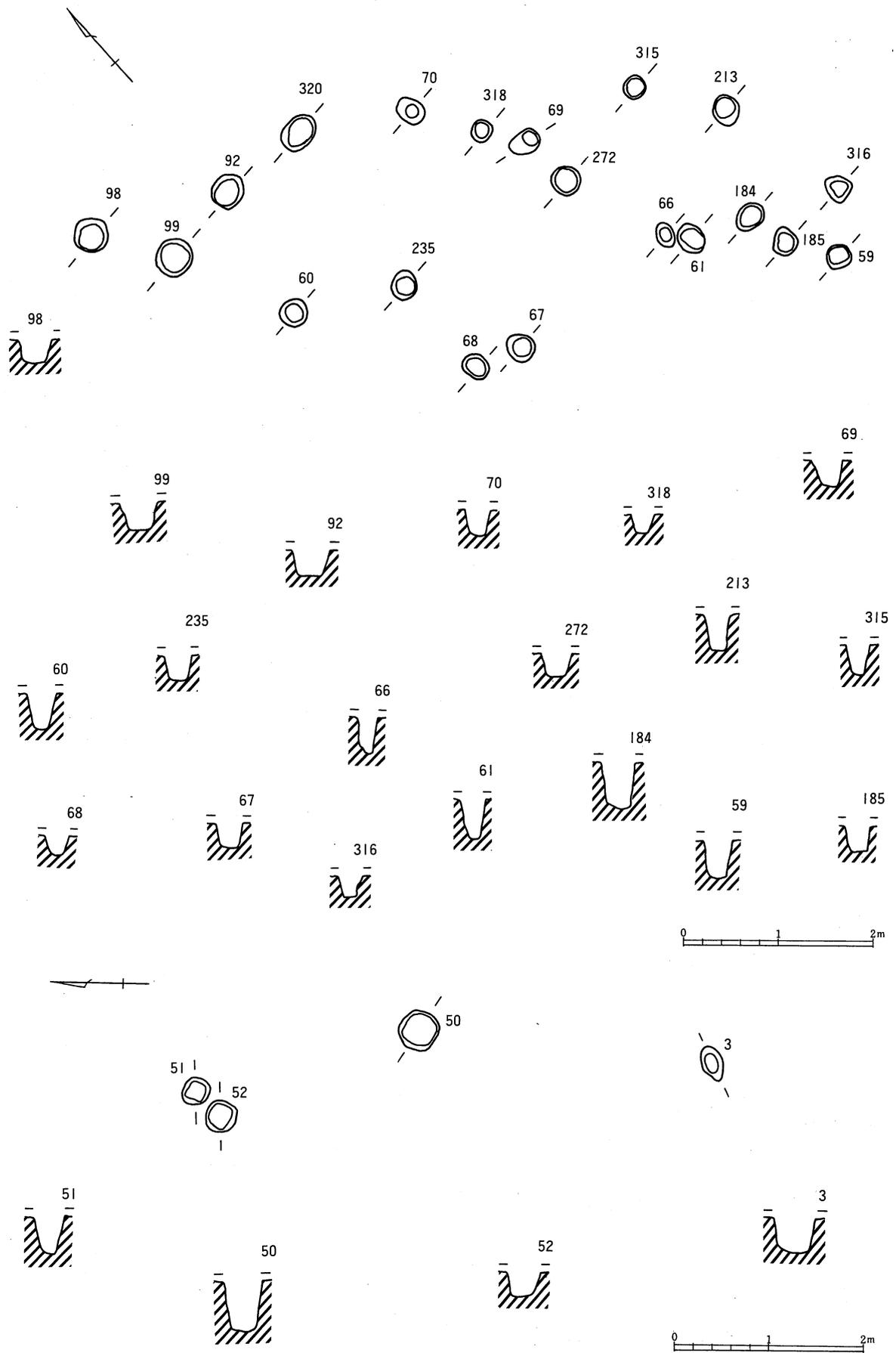
第12图 土坑实测图 (5)



第13图 土坑实测图(6)



第14图 土坑实测图(7)



第15图 土坑实测图(8)

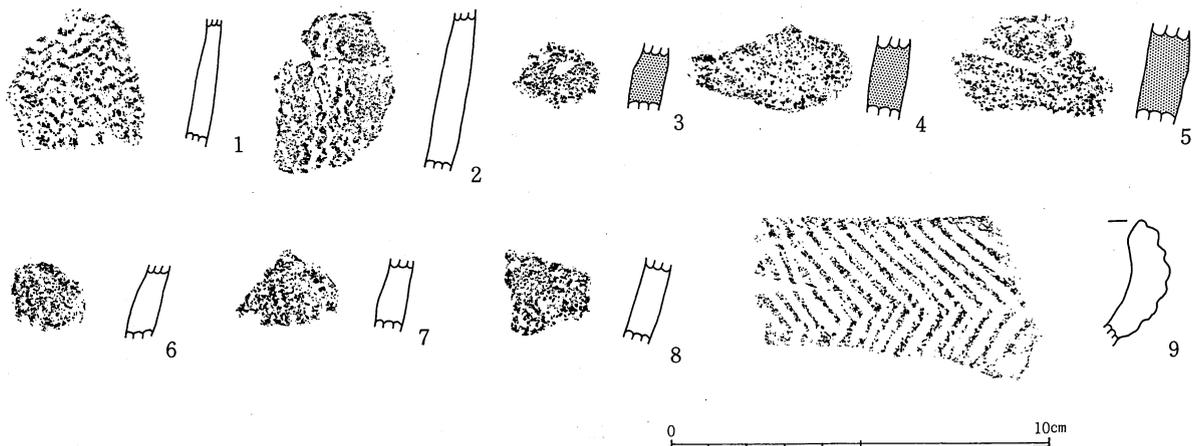
2. 土 坑

調査区内からは249基の土坑が検出され、この内の1基は出土土器からみて縄文時代前期に比定される。しかし、他の土坑は出土遺物が無く、時期決定ができなかった。

第3節 出 土 遺 物

東山遺跡からの遺物の出土量は極めて少なく、黒曜石の碎片などを含めても数十点しか出土しなかった。これらの遺物の中には平安時代の甕の破片なども僅かながらみられたが、細片のため図示できなかった。

1・2は縄文時代早期の押型文土器の胴部破片である。共に山形押型文が施文され、1は横位に2は縦位に施されている。樋沢タイプの押型文土器と言える。3～5は無文土器であるが、3には少量ながら繊維が混入されている。6・7は単節 RL 縄文が施文される縄文前期の土器である。9は平縁の口縁を有する縄文前期末の土器であり、湾曲した口縁部には沈線を綾杉状に施文している。



第17図 東山遺跡出土遺物

第3表 東山遺跡遺物観察表

番号	器種	部位	器形および文様	胎土	色調		焼成	出土位置	備考
					外面	内面			
1	深鉢	胴部	山形押型文	石英・砂粒	褐色	暗褐色	不良	一括	
2	深鉢	胴部	山形押型文	石英・輝石	褐色	灰褐色	普通	一括	
3	深鉢	胴部	無文	センイ・輝石	褐色	暗褐色	不良	A-2トレンチ	
4	深鉢	胴部	無文	センイ・石英・砂粒	褐色	黒褐色	普通	A-8トレンチ	
5	深鉢	胴部	無文	センイ・砂粒	茶褐色	黒褐色	普通	A-0トレンチ	
6	深鉢	胴部	単節 RL 縄文	小石	褐色	褐色	普通	B-6トレンチ	
7	深鉢	胴部	単節 RL 縄文	砂粒	褐色	褐色	普通	B-6トレンチ	
8	深鉢	胴部	無文	砂粒	灰褐色	灰褐色	普通	A-1トレンチ	
9	深鉢	口縁	口縁上部に沈線を綾杉状に施文する。 平縁	石英・輝石・砂粒	暗褐色	褐色	良好	B-4トレンチ	口縁部が内湾する。

第Ⅳ章 下り坂遺跡の調査

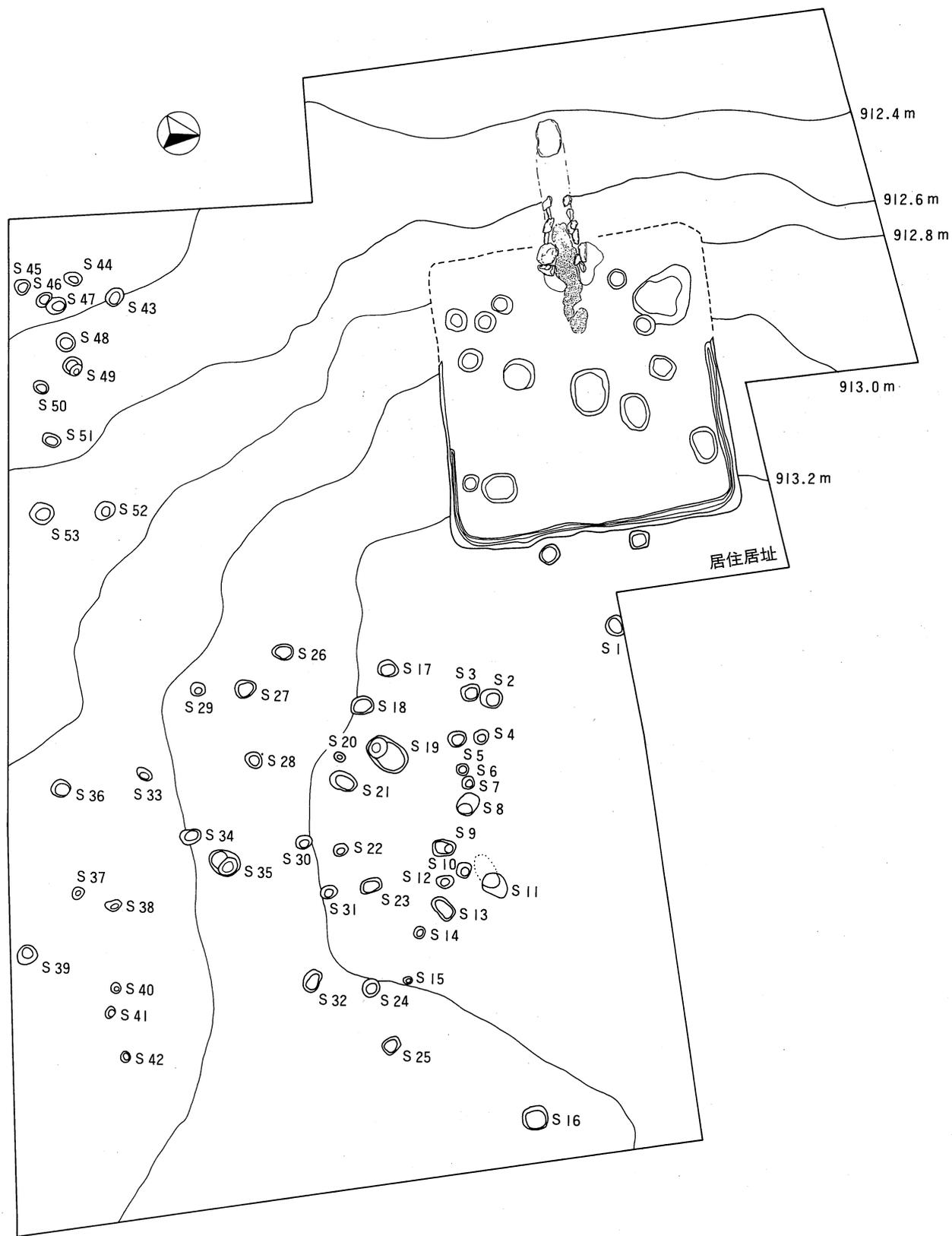
第1節 調査の概要

下り坂遺跡は東山遺跡と同様、塩尻市北小野勝弦地区に立地しており、位置的には小丘陵を狭んだ南側に位置している。遺跡は南向きの緩やかな斜面に立地し、なおかつ背後に小丘陵を抱いているため北風の影響が少なく、絶好の生活環境に恵まれていたことだろう。

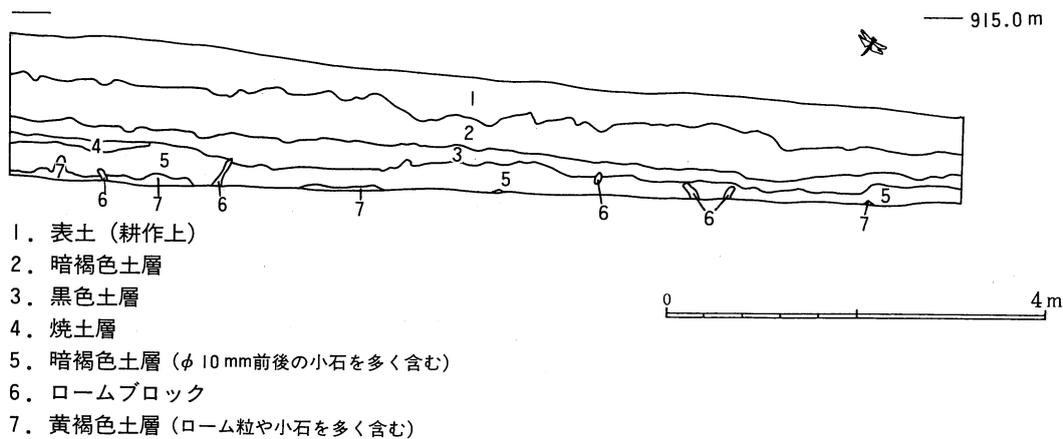
調査の結果、平安時代の竪穴住居跡1軒と住居に伴う大型カマドが検出された。また、土坑も53基検出されている。遺物としては、勝弦地区で初めて旧石器時代の遺物であるナイフ形石器が発見され、勝弦の歴史に新たな1ページを加えることとなった。縄文時代の遺物としては、早期の押型文土器、条痕文土器など縄文時代でも比較的古い時期の遺物が出土している。縄文時代以降空白の時期があり、平安時代になり再び生活の痕跡が見いだせるようになる。この時代の遺物としては、灰釉陶器、土師器、須恵器、黒色土器などが多く出土した。この他鉄鏃などの鉄製品をはじめとして、鉄滓、砥石といった鍛冶に関連する遺物も発見され、大型カマドの存在も考慮して本遺跡において小規模ながらも鍛冶が行われていた可能性もあることを示唆しておきたい。



第18図 下り坂遺跡位置図



第19図 下り坂遺跡遺構全体図



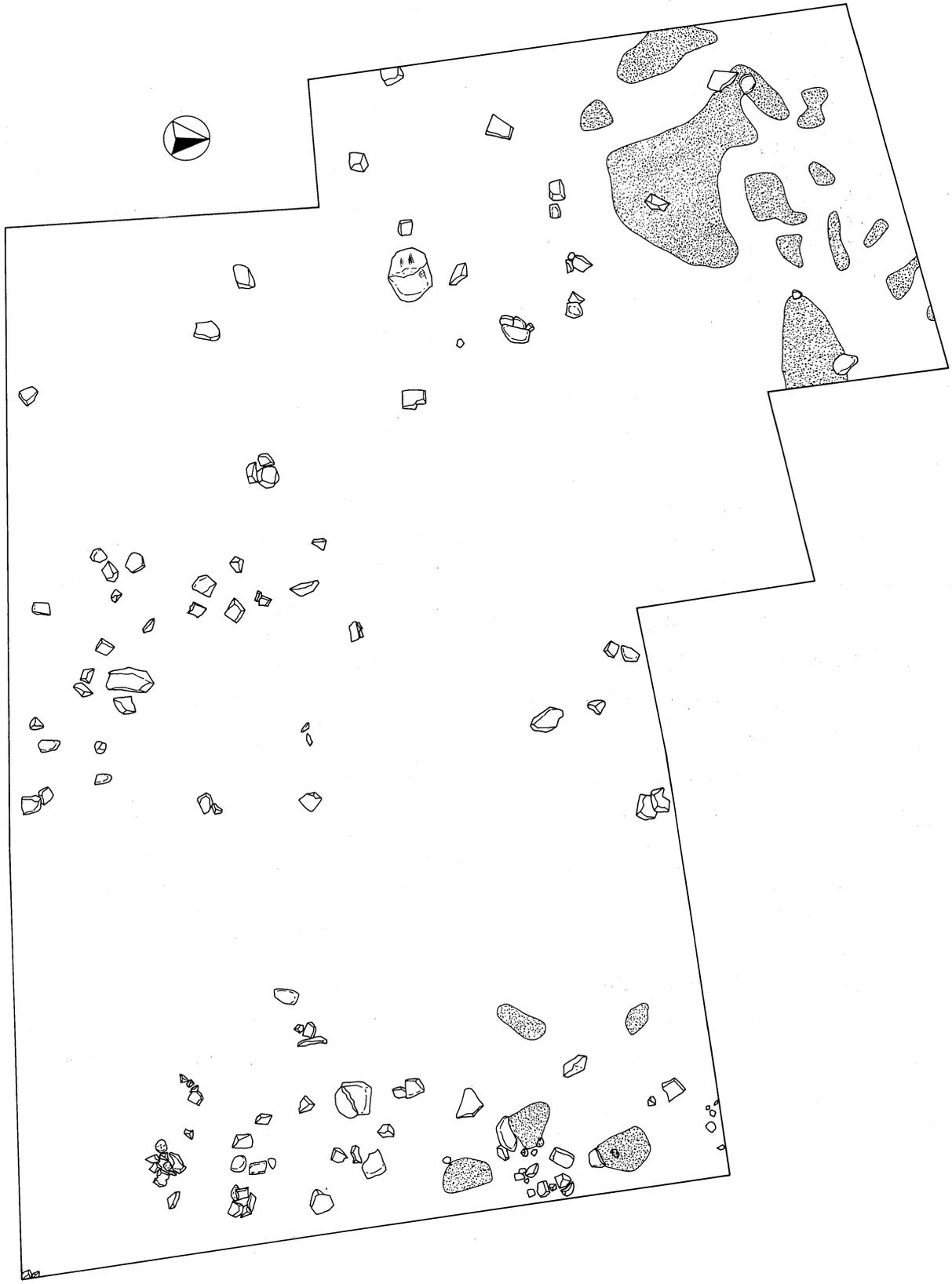
第20図 下り坂遺跡基本層序 (調査区東面)

第2節 基本層序

本遺跡における基本層序を調査区東面において確認した。(第20図)

調査区域は北から南へと緩やかに傾斜する南向きの斜面で、発掘以前は畑として利用されており、約40~50cmの深さまで耕作がおよんでいた。このため1層と2層の境目は凹凸が激しく不安定であった。2層は暗褐色土層で厚さ20~40cmを測り、良くしまった土をしているが遺物の出土量は少なめである。つづく3層は黒色土層で他の層と比較して薄く約20cmほどであるが、遺物の出土が多くみられる。この3層を中心として5層の上部にかけて直径10~70cmの焼石が多量にみられ、調査区内全域において広く分布している(第21図)。また、焼け石に伴うように焼土も確認でき、基本層序の4層として確認することができた。この焼土層は調査区の北西および北東部分に集中してみられ、5~10cmの厚さを有している。しかし、何故このように焼石や焼土が広範囲に分布しているのかは不明である。5層は小石混じりの暗褐色土層でローム層へと続いている。この層から遺物の出土は少ない。ローム層は上部がソフトローム層、その下部にハードローム層がみられた。旧石器時代のナイフ形石器は上部のソフトローム層から出土している。

下り坂遺跡は、第三章で触れた東山遺跡とは小丘陵を挟んで位置しているが、層序的には大きく異なり、地表からローム面までの堆積の深さも圧倒的に本遺跡の方が深く、層序も複雑である。これは本遺跡のすぐ背後に小丘陵が控え、東山遺跡と比べ傾斜が急であるため、背後の丘陵から大量の土砂が流れ込んだためであると考えられる。

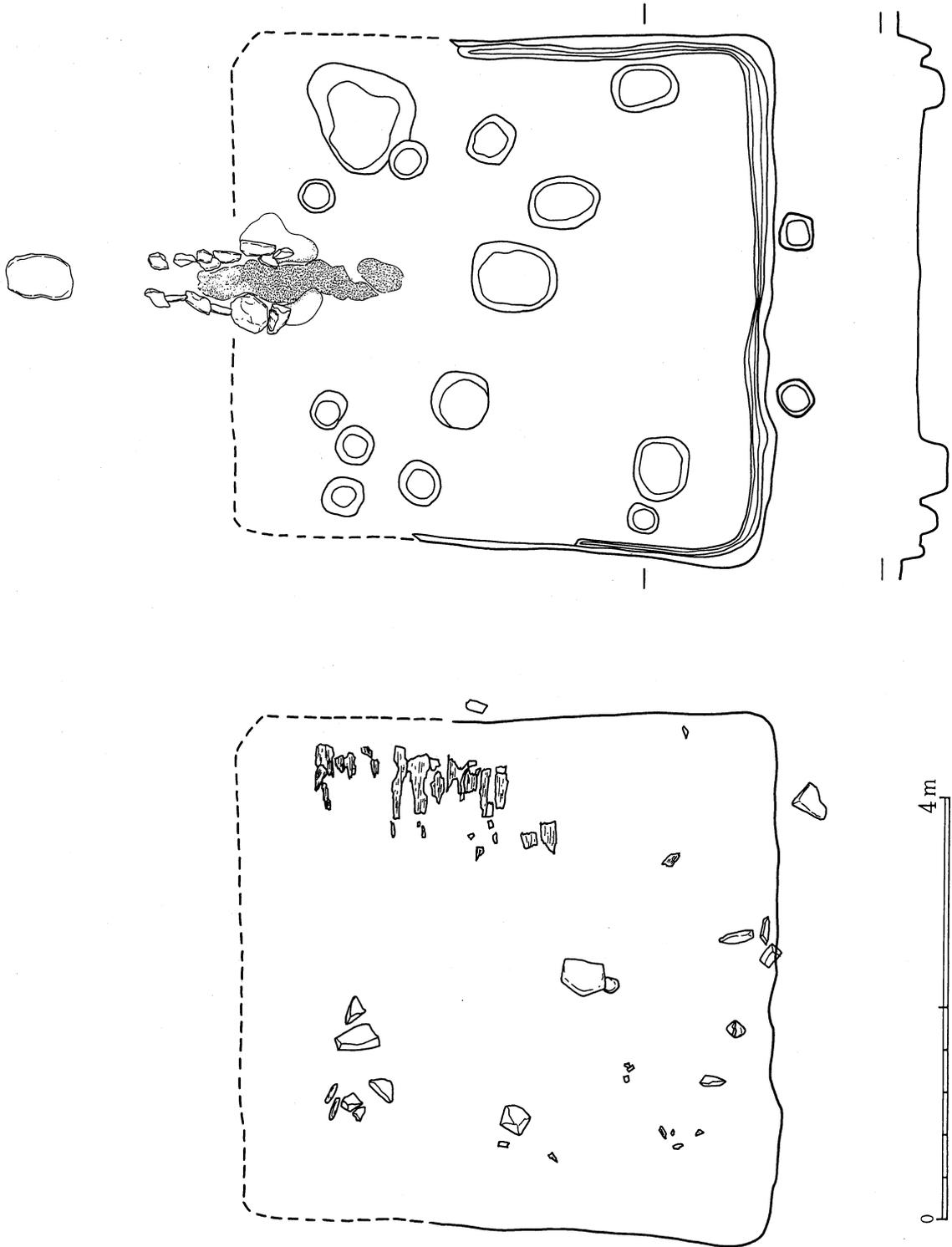


第 21 図 焼石および焼土分布状況

第3節 検出遺構

1. 竪穴住居跡

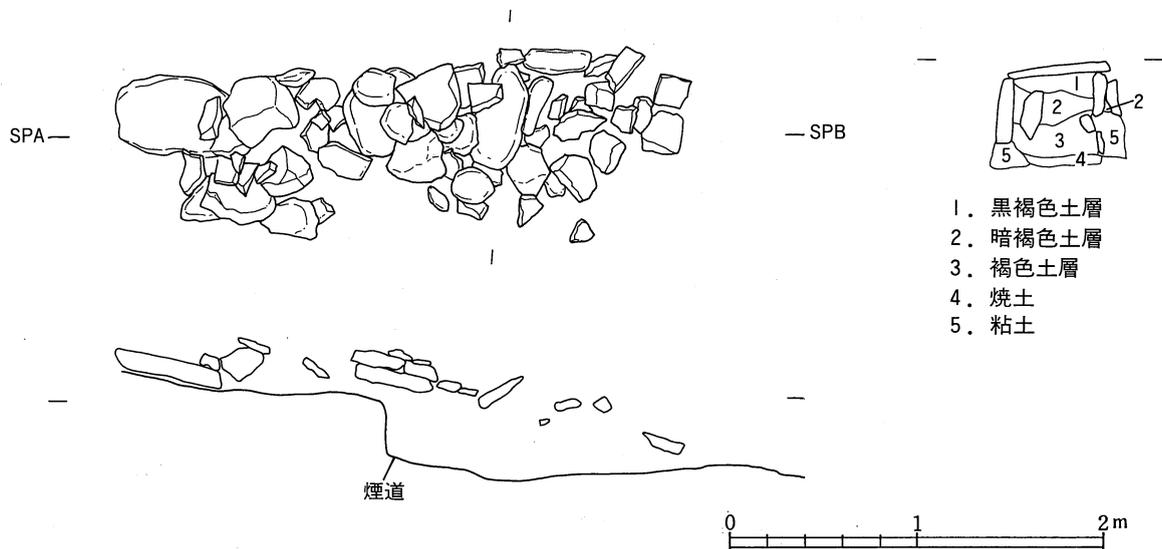
第1号住居跡 (第22図)



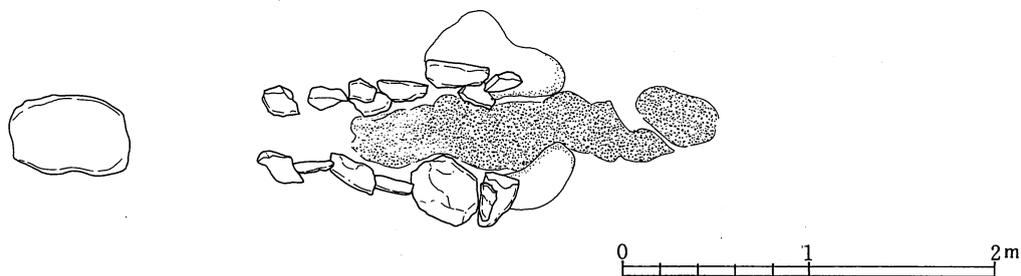
第22図 第1号住居跡実測図

調査区北西に位置する。南北は5.1mを測るが、東西方向は西側部分の壁が欠損しているため正確な長さは不明だが、約5m程の長さを有するものと思われる。住居の東半部には幅15cm程の周溝が廻り、残存している部分の壁はローム層に掘込まれ、垂直に近い立ち上がりをもつしっかりした壁である。床面は全体的に締まりが弱い。カマド周辺の床面は非常に締まった床で部分的に焼成を受けている箇所もみられる。住居跡の覆土は、暗褐色土1層でここからは大量の炭化材が検出され、焼土が散乱して確認された。住居に伴うカマドは粘土で構築された袖を有するカマドであり、長さ3.0m、幅0.9mという長大なカマドである（第23・24図）。カマドの上部には大量の焼石がみられるが、それに比べカマドの両脇の石は少ない。しかし、比較的大きな石を立てて造られているカマドの壁は、石の周囲を粘土によって固定されていた。カマド上部は崩壊している部分が多かったが、カマドの壁にまたがるように平で薄い石が組んである箇所も見受けられた。カマド内部は非常に強い焼成を受けたためであろうか、焼土が厚く堆積していた。また、カマド上部からは鉄滓が出土し、カマド脇から砥石が見つかったことから、本址において小鍛冶が行われていた可能性がある。

本住居跡は出土した遺物から、7期（9世紀後半）に比定される。



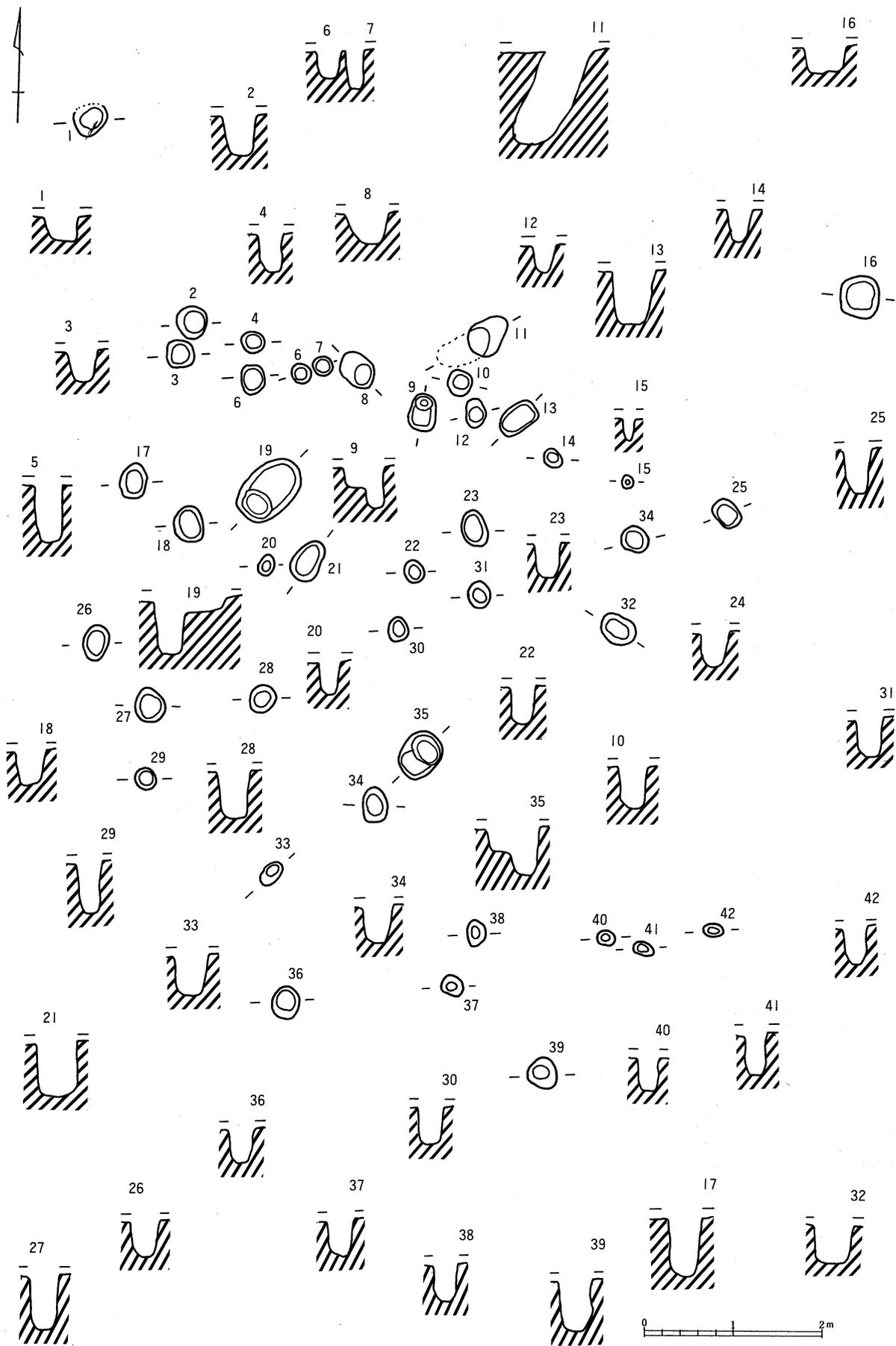
第23図 カマド平面および断面図



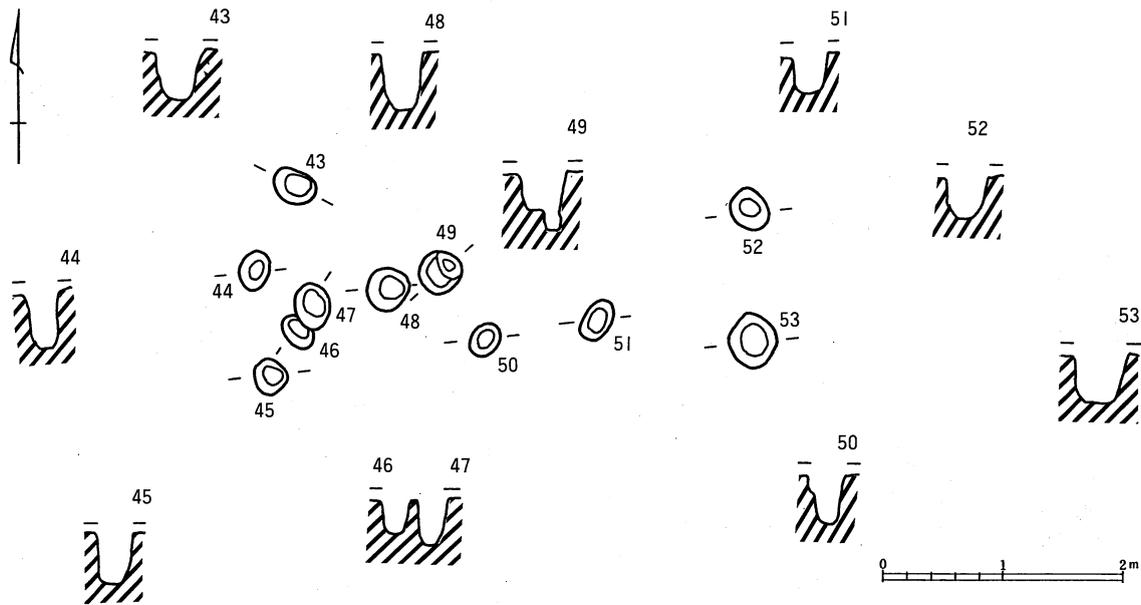
第24図 カマド完掘図

2. 土 坑

下り坂遺跡からは53基の土坑が検出された。これらの多くは直径20～30cmを測り、調査区の南側部分にまとまってみられる。土坑内からは遺物の出土が全くみられず、時期決定は困難であるが付近から平安時代の遺物が多く出土していることから該期の遺構である可能性が高い。



第25图 土坑实测图 (I)

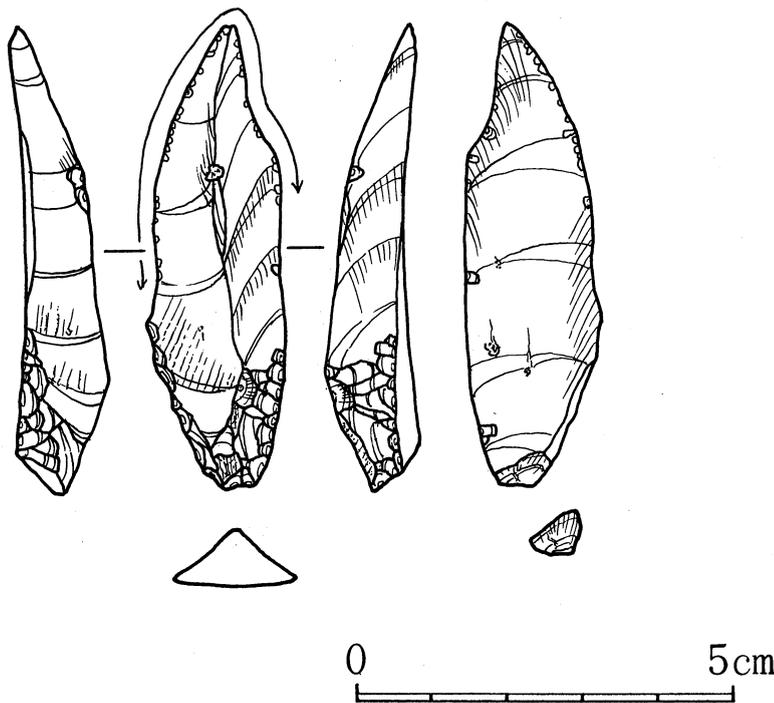


第26図 土坑実測図(2)

第4節 出土遺物

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺物は1点のみであり、調査区北東のローム層上部から出土している。長さ6.1cm、幅1.8cmのナイフ形石器である。先端部分に使用の際についたと思われる剝離の痕跡がみられ、表面の基部に調整が確認される。これまで勝弦地区において旧石器時代の遺物の出土はなく、初めての出土となった。

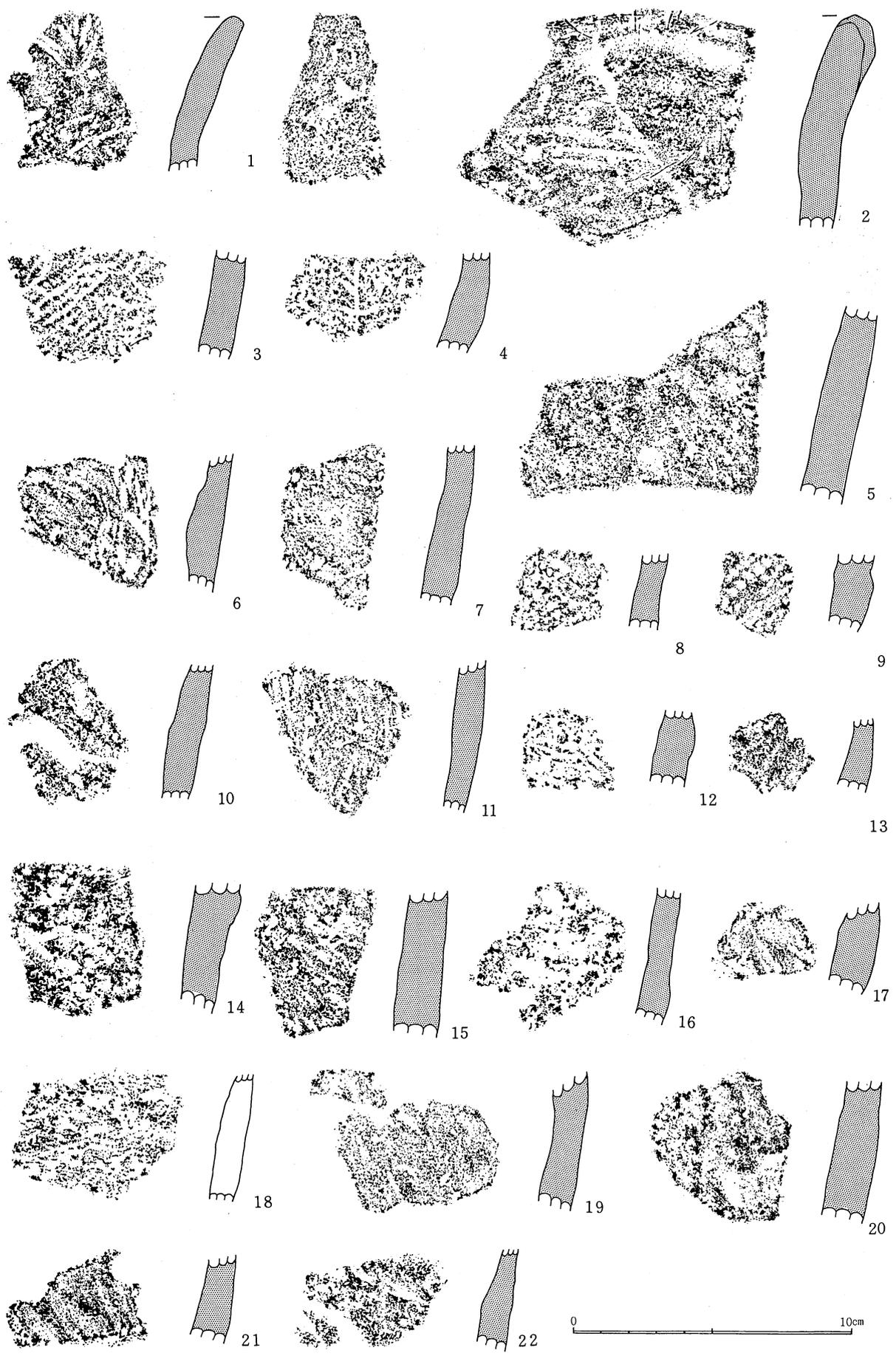


第27図 ナイフ形石器

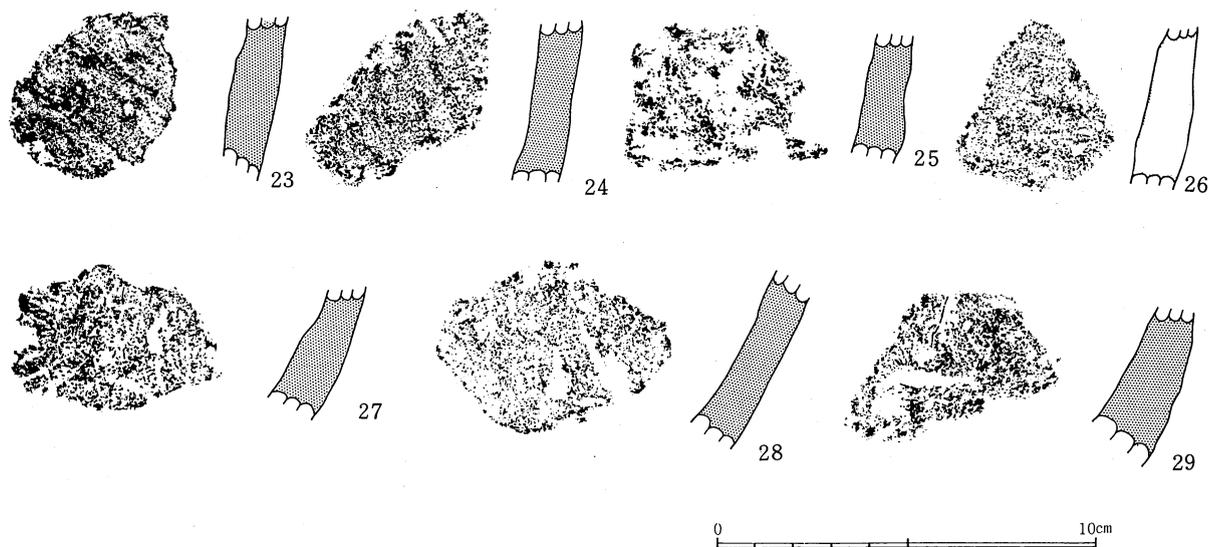
2. 縄文時代

下り坂遺跡から出土した縄文土器は、そのほとんどが繊維土器であり、时期的に大きな隔たりはなかったと考えられる。

1・2は口縁部破片である。1は表面に短沈線が施文され、裏面の口唇直下には爪形文が2条廻っている。2は肥厚口縁を有する無文土器である。1・2共に胎土中に多量の繊維が混入されている。3～12・14～25は繊維を含んだ土器の胴部破片である。3・4・7～10・14には縄文が施文され、6には撚糸文が施文されている。5・15・16



第28図 下り坂遺跡出土土器 (I)

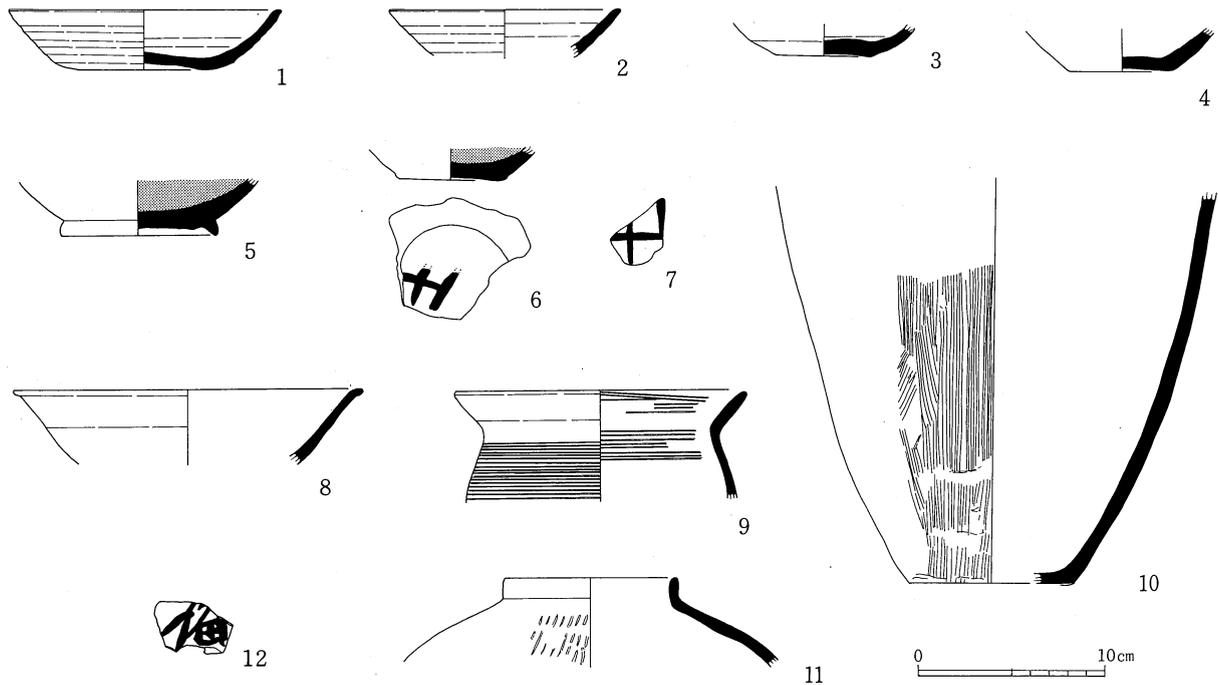


第29図 下り坂遺跡出土土器 (2)

5・15・16・18～25は無文土器である。この内15の裏面には棒状工具による刺突が確認される。11・12は条痕文が施され、17には沈線文がみられる。18・26は無繊維の無文土器である。27～29は底部付近の破片であり、すべて繊維土器である。これらの底部形態は器形からみて尖底である。

第4表 下り坂遺跡遺物観察表(1)

番号	器種	部位	器形および文様	胎土	色調		焼成	出土位置	備考
					外面	内面			
1	深鉢	口縁	平縁・口縁上部に短沈線を菱杉状に 施文 裏面に爪形文を横位に2条施文	センイ・輝石・金ウンモ	褐色	黒褐色	普通	一括	
2	深鉢	口縁	緩やかな波条 無文 口縁部肥厚	センイ・石英	茶褐色	灰褐色	普通	一括	
3	深鉢	胴部	単節 RL 縄文	センイ・白石粒子・輝石	褐色	暗褐色	普通	一括	
4	深鉢	胴部	単節 RL 縄文	センイ・白石粒子	褐色	灰褐色	不良	一括	
5	深鉢	胴部	無文	センイ・輝石	褐色	暗褐色	普通	1住	
6	深鉢	胴部	無節Lの燃紋	センイ・石英	褐色	黒褐色	普通	一括	裏面一部剥落
7	深鉢	胴部	単節 RL 縄文	センイ・石英・輝石	茶褐色	暗褐色	普通	一括	
8	深鉢	胴部	単節 RL 縄文	センイ・石英	褐色	暗褐色	普通	黒土一括	
9	深鉢	胴部	単節 RL 縄文	センイ・輝石	褐色	暗褐色	普通	一括	
10	深鉢	胴部	単節 RL 縄文	センイ・石英	褐色	暗褐色	普通	一括	
11	深鉢	胴部	条痕文	センイ・石英	灰褐色	暗褐色	普通	一括	
12	深鉢	胴部	条痕文	センイ	褐色	暗褐色	不良	一括	
13	深鉢	胴部	無文	金ウンモ・石英	褐色	褐色	普通	一括	
14	深鉢	胴部	単節 RL 縄文	センイ・石英・金ウンモ	褐色	暗褐色	普通	一括	
15	深鉢	胴部	無文	センイ・石英	褐色	暗褐色	普通	1住	裏面に棒状工具
16	深鉢	胴部	無文	センイ・砂粒	褐色	褐色	不良	1住	による刺突あり
17	深鉢	胴部	浅い沈線を施す	センイ・石英・砂粒	褐色	暗褐色	普通	一括	
18	深鉢	胴部	無文	センイ・小石	暗褐色	褐色	不良	一括	
19	深鉢	胴部	無文	センイ・ウンモ	褐色	暗褐色	普通	一括	
20	深鉢	胴部	無文	センイ・石英・白石粒子	褐色	暗褐色	普通	一括	
21	深鉢	胴部	無文	センイ・輝石・ウンモ	褐色	暗褐色	普通	一括	
22	深鉢	胴部	無文	センイ・砂粒	褐色	黒褐色	普通	黒土一括	
23	深鉢	胴部	無文	センイ・ウンモ	褐色	暗褐色	普通	一括	
24	深鉢	胴部	無文	ウンモ・砂粒・センイ	暗褐色	暗褐色	普通	一括	
25	深鉢	胴部	無文	センイ・小石	褐色	黄褐色	不良	黒土一括	
26	深鉢	胴部	無文	輝石・ウンモ・砂粒	褐色	暗褐色	普通	黒土一括	
27	深鉢	底部付近	無文	センイ・砂粒	褐色	灰褐色	普通	1住	
28	深鉢	底部付近	無文	センイ・輝石	褐色	暗褐色	普通	1住	
29	深鉢	底部付近	無文	センイ・石英	褐色	暗褐色	普通	1住	



第30図 第1号住居址出土遺物

3. 平安時代

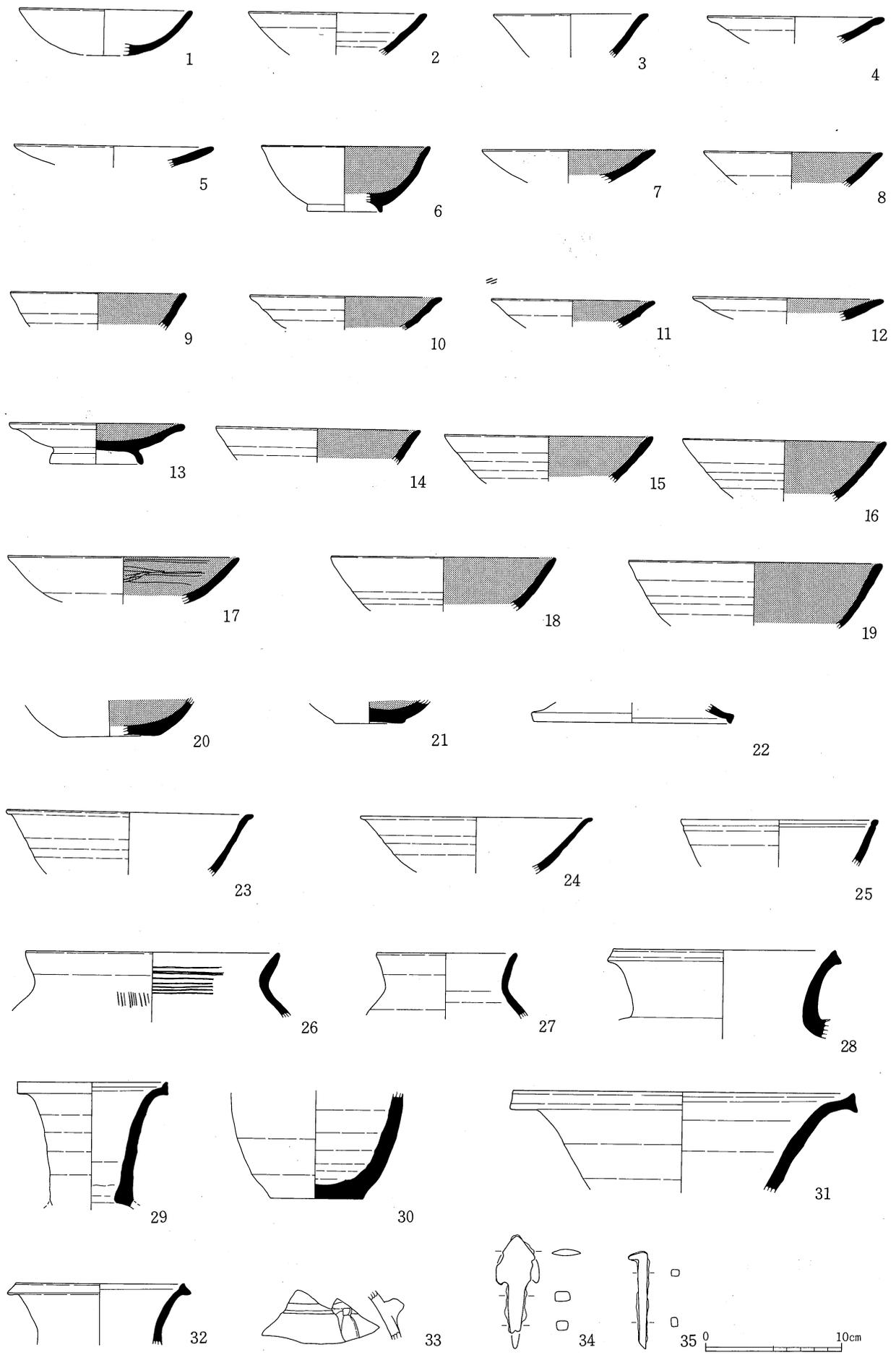
住居跡内出土遺物

坏8点、椀1点、小型甕1点、甕1点、短頸壺1点の計12点である。坏のうち6・7・12は墨書土器であるがいずれも破片のため、どのような文字が書かれていたのか不明である。今回図示した遺物のうち大部分が土師器および黒色土器であり、須恵器などが少ないような感じを受けるが、実際は小破片のため図示できなかった多くの遺物があり、これらの中には多くの須恵器があることは触れておきたい。

これらの遺物はその形態的特徴から、7期（9世紀後半）に比定される。

第5表 下り坂遺跡遺物観察表(2)

番号	種別	器形	寸法 (cm)			色調		整形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		
1	土師器	坏	14.3	5.8	3.2	灰白～黒	黄褐	ロクロナデ 回転糸切り	
2	"	"	12.1			黄褐色	"	"	
3	"	"		5		明褐色	明褐	" 回転糸切り	
4	"	"		5.4		"	"	" "	
5	黒色土器	"				暗褐色	黒	"	
6	"	"		8.1		"	"	" 墨書	
7	土師器	"		5.7		"	黒	" "	
8	灰釉陶器	椀	18.4			白褐色	白褐色	"	
9	土師器	小型甕	15.3			暗褐色	暗褐色	ロクロ痕・外面刷毛目	
10	"	甕				"	"	外面刷毛目	
11	須恵器	短頸壺	9.1	8.7		青灰	青灰	外面タタキ	
12	黒色土器	坏				暗褐色	黒	墨書	



第 31 图 遺構外出土遺物

第6表 下り坂遺跡遺物観察表(3)

番号	種別	器形	寸法 (cm)			色調		整形・調整の特徴	備考
			口径	低径	器高	外面	内面		
1	土師器	坏	12.6	3.6	3.4	黄 褐	黄 褐	ロクロナデ	
2	"	"	13			明 褐	明 褐	"	
3	"	"	11.3			黄 褐	黄 褐	"	
4	"	"	12.8			明 褐	明 褐	"	
5	"	"	14.5			"	"	"	
6	黒色土器	"	12.3	5.4	4.8	暗 褐	黒	"	
7	"	"	12.7			"	"	"	
8	"	"	12.9			"	"	"	
9	"	"	12.5			"	"	"	
10	"	"	14			黄 褐	"	"	
11	"	"	11.9			暗 褐	"	"	
12	"	"	13.8		3	黒	"	"	
13	"	"	12.6	6.6		"	"	"	
14	"	"	14.9			暗 褐	"	"	
15	"	"	15.2			黄 褐	"	"	
16	"	"	14.8			"	"	"	
17	"	"	16.8			暗 褐	"	"	へラミガキ
18	"	"	16.3			"	"	"	
19	"	"	18.4			"	"	"	
20	"	"		7.5		"	"	"	
21	"	"		4.7		褐	"	"	
22	須恵器	蓋		14.5		青 灰	青 灰	ロクロナデ	
23	灰釉陶器	椀	18.1			灰 白	灰 白		
24	"	"	17			"	白 緑		
25	"	"	14.3			"	灰 白		
26	土師器	甕	18.6			暗 褐	暗 褐	ロクロナデ	刷毛目 指圧
27	須恵器	短頸壺	10.3			青 白	青 灰	ロクロナデ	
28	"	"	16.2			"	自然釉	ロクロ痕	
29	"	長頸瓶	11			青 灰	青 灰	"	
30	"	" (?)		6.8		"	"	"	
31	"	甕	25			"	自然釉	"	
32	"	長頸瓶	12.5			"	青 灰	"	
33	"	四耳壺				"	"	"	
34	鉄鏃								
35	鉄釘								

遺構外出土遺物

図化した遺物のうち坏が最も多く21点ある。1～5は土師器、6～21は黒色土器である。これらはロクロナデ調整がなされ、17には併せてへラミガキもみられる。22は須恵器の蓋でロクロナデが行われ、23～25は灰釉陶器椀である。26・31は甕で、26は土師器、31は須恵器である。27・28は短頸壺、29・30・32は長頸瓶、33は四耳壺であり、すべて須恵器である。これらの遺物は6期の遺物の僅かながら見られるが、大部分はその形態的特徴などから7期属すると考えられる。また、鉄鏃や鉄釘といった金属製品も出土している。

第V章 考古学から見た勝弦地区

勝弦地区の考古学的調査は、大正時代から始まるが、調査が本格化するのは戦後になってからである。大正時代には鳥居龍蔵・八幡一郎による諏訪史・上伊那郡史に関連した先駆的な調査が行われ、戦後になり20年代には大場磐雄による上の宮水神・糠塚遺跡の調査や郡誌編纂のための分布調査が行われた。この時期で最も重要な調査は戸沢充則を中心とする樋沢遺跡の発掘調査で、昭和26年に実施されている。出土土器の層位区分から押型文土器を樋沢式→細久保式という型式変化をとらえ、縄文早期土器編年確立に極めて大きな功績を残した。以後、樋沢遺跡はこの地域の考古学的調査の中心的存在として昭和56年まで断続的に調査は続けられた。

昭和47年にオープンした信州塩嶺高原ゴルフ場に関連した調査では、地域内の分布調査が中信考古学会によって実施され、その後、昭和46年には石塚遺跡が発掘調査され、縄文早期の土器・石器類が得られている。そして、今回の「市民いこいの森」整備に先立つ東山・下り坂遺跡の発掘が実施されたこの地区で初めて平安時代の住居が発見された。

こうした外部の研究者による考古学調査とは別に、地元の細井信夫は地区内の遺物採集を丹念に行い、

勝弦における遺跡のあり方を明らかにするための基礎的研究を行った。その結果は昭和34年に松本深志高校とんぼ祭において発表され、その成果は藤沢宗平により「松本市・塩尻市・東筑摩郡誌」に取り入れられている。

本稿では以上のような研究の成果に導かれながら勝弦地区の考古学的特性を考えてみたい。



○旧石器 ●縄文早期押型文 ○縄文早期後半

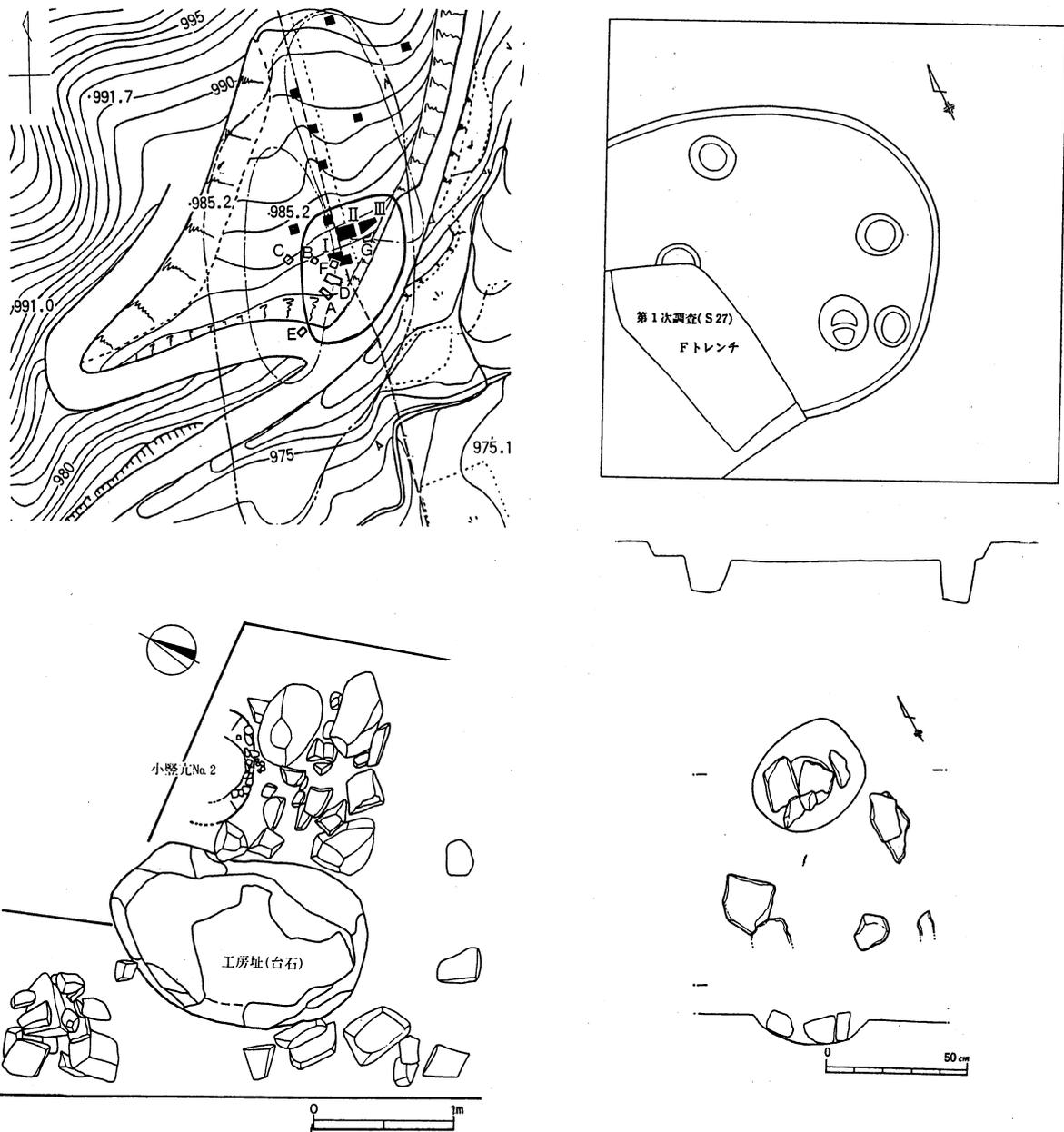
第32図 遺跡分布図(1)

1. 遺跡と遺物

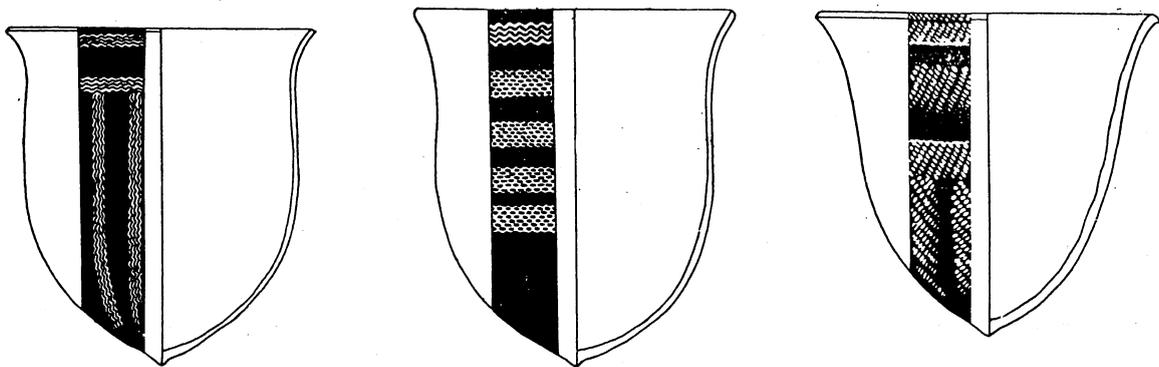
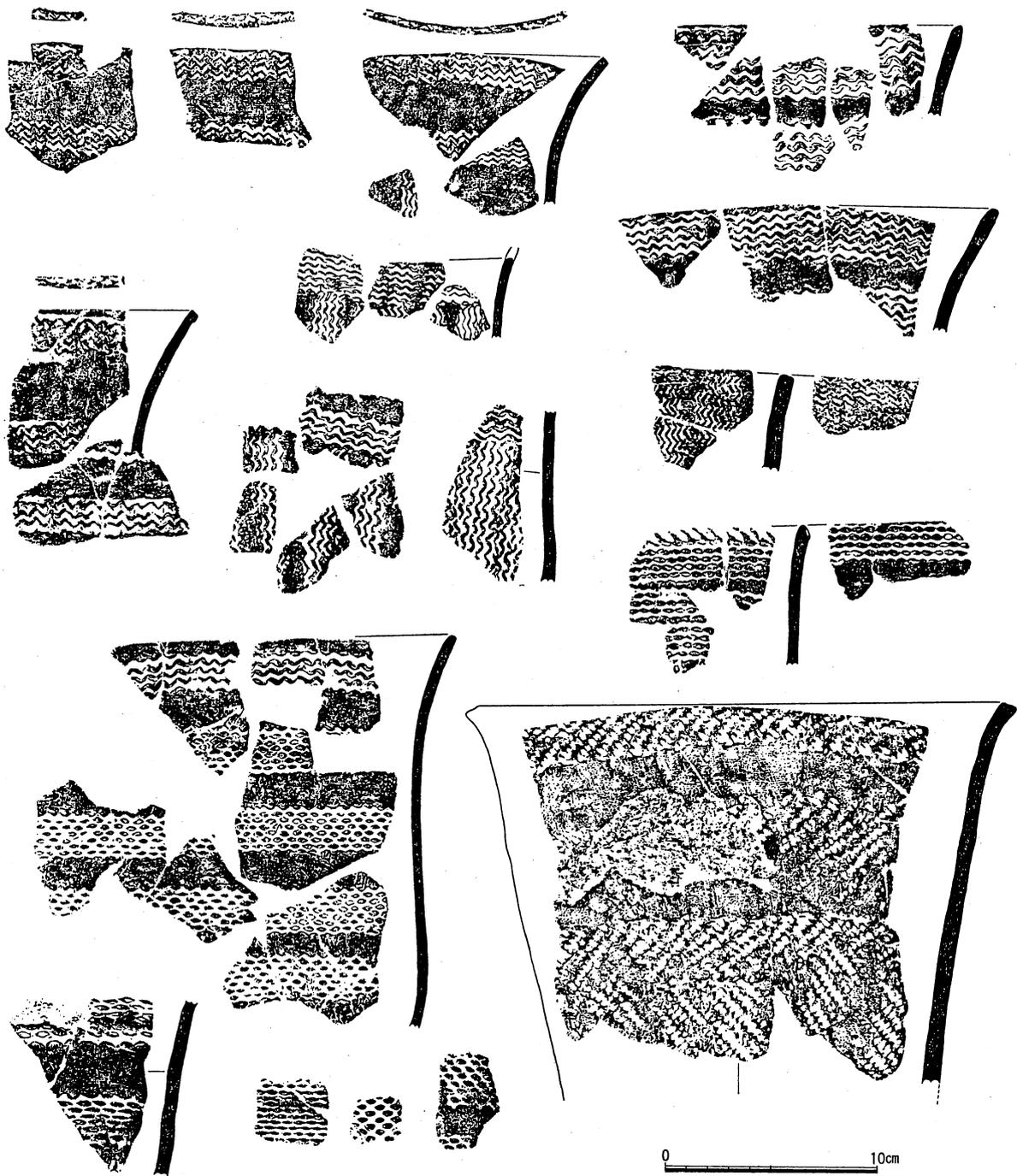
1) 樋沢遺跡

県道榑川岡谷線を勝弦峠に向かって上ると、塩尻・岡谷市境にある信州塩嶺高原ゴルフ場の入口に達する。ここは勝弦峠の西側に展開する小盆地状地形の口をおさえる場所にあたり、南に傾斜する小さな尾根上のテラスにある。遺跡は岡谷市側にも広がり、その範囲は110×45mにわたっている。

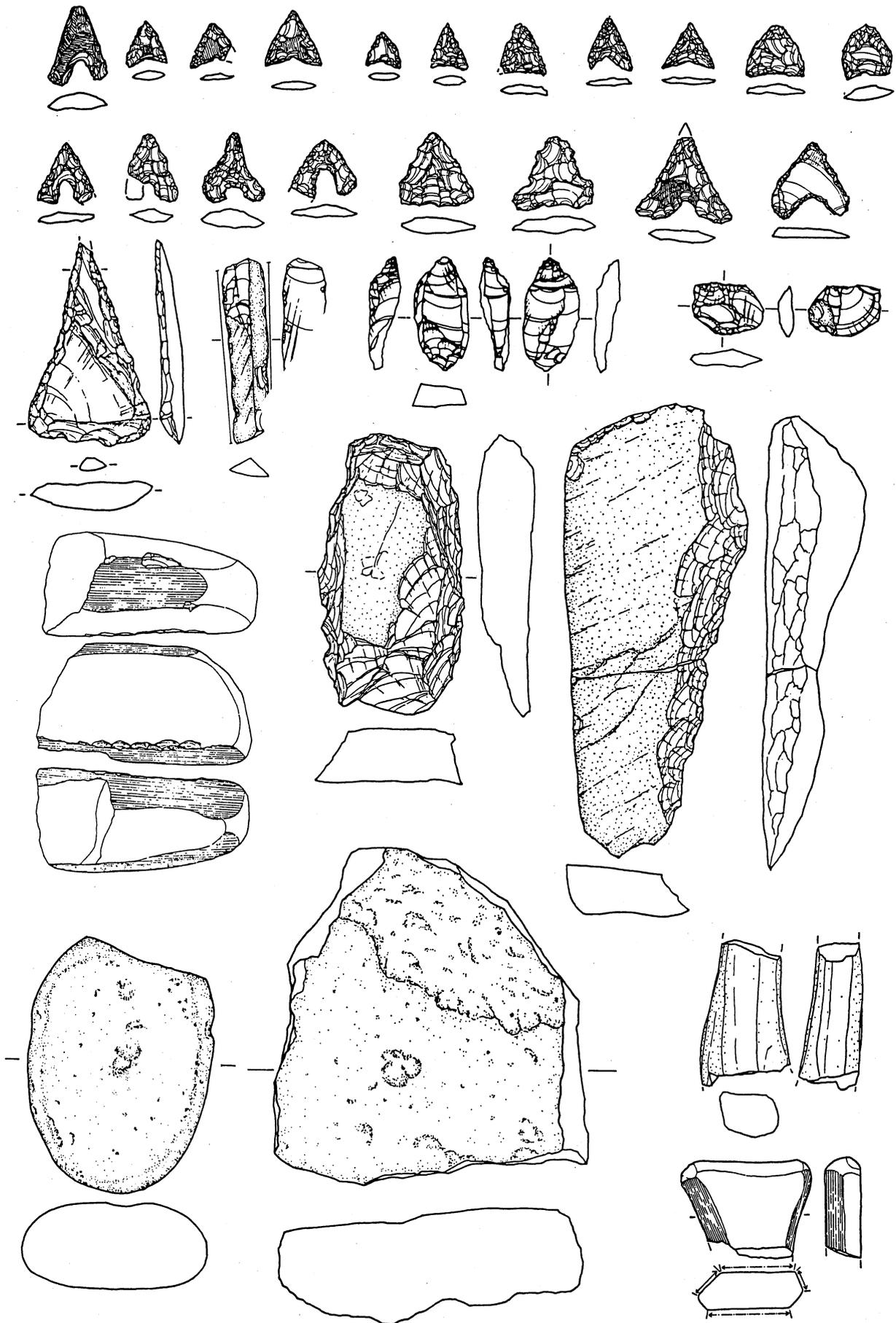
昭和26年、戸沢充則・松沢亜生によって発見され、同年の発掘調査では縄文時代早期押型文土器編年確立の基礎資料となる多量の遺物が発見された。その後も断続的に小規模な発掘調査は行われたが、昭和54年の県道拡幅工事に伴った岡谷市教育委員会による緊急発掘調査を経て、昭和56年、遺跡の範囲および包含層の確認のための発掘調査が塩尻・岡谷両市の教育委員会によって実施された。



第33図 樋沢遺跡



第 34 図 樋沢遺跡出土土器



第 35 图 樋沢遺跡出土石器

この数次にわたる発掘調査によって、押型文期の住居址1、土壇4、集石5、作業台と思われる巨石1が発見された。住居址は長径2.2mの小さな円形を呈する竪穴住居で、室内にはまだ炉が設けられていない。この住居を中心として土壇・集石が分布し、集石のいくつかには木炭片があったことから炉址と考えられている。作業台と思われる巨石は、1.8×1.3mもあり、その上面には磨耗痕が残され、石の周囲には黒曜石片が多量に散布しており、石器製作の場と推定されている。

出土した土器は、山形・楕円・格子目などの押型文・縄文・捺糸文・沈線文・条痕文・押引文などが施文された縄文早期に属するものである。これらの土器の中で、砲弾形の尖底土器で、山形・楕円の押型文を帯状に施文した特徴ある土器を「樋沢式土器」として型式設定し、その出土層位の観察から帯状施文（樋沢式）→非帯状施文（細久保式）という変遷が明らかとなった。押型文土器を層位的に区分し、編年的な前後関係を初めて明らかにしたとして学界から高い評価が与えられ、以後、押型文土器研究の重要な基準としての役割を果たすこととなった。

出土した石器は、石鏃152・石鏃未製品74・磨石12・特殊磨石22・石皿2・スクレイパー59・楔形石器117・使用痕のある剥片187・磨製石斧4・砥石11・礫器4・石核75がある。これらの石器の中で、小形の局部磨製石鏃や長い脚をもつ鋏形鏃は押型文土器に特有なものであり、また特殊磨石はこの時期から出現する特徴がある石器である。石器群全体の特徴としては、石鏃・スクレイパーなどの剥片石器を主体とし、前期以降に主要な石器となる磨製石斧・石皿・磨石などがわずかに含まれていることがあげられる。

住居を中心とした小さな村の形成、豊富な土器・石器類など樋沢遺跡は、勝弦地区に存在する多くの縄文早期押型文期遺跡の中核的存在の遺跡であったといえる。

2) 諏訪洞遺跡

樋沢遺跡から100mほど西側に下りた所に諏訪洞の溜池がある。遺跡はこの溜池を中心として広がっている。縄文時代早期の山形・楕円押型文・条痕文土器・石鏃・石匙が出土している。

縄文早期を中心とした遺跡で、近距離にある樋沢遺跡との関連性の強い遺跡であろう。

3) 大畑遺跡

県道榑川岡谷線を勝弦峠方面から下ってくると、右手に竹入川に向かう道路との分岐点となる。この2本の道路にはさまれた地域に遺跡はある。縄文時代早期の山形押型文・捺糸文・縄文施文土器、中期曾利式土器、石鏃、平安時代土師器甕が出土している。

4) 下り坂遺跡

今回、発掘調査した遺跡である。平安時代の住居址が1軒発見され、土師器・須恵器・灰釉陶器が伴出している。住居は竪穴住居で、長大な竈が設けられ、付近からは鉄滓が出土した。報告者はこの住居が小鍛冶に関係する家ではなかったかと考えている。

この他に旧石器時代のナイフ型石器、縄文時代早期の条痕文土器が出土している。

旧石器時代の遺物や平安時代住居の発見は勝弦地区では初めてであり、勝弦地区の歴史を大きく遡らせ、また、平安時代の住居の発見によってこの地域の古代の生活内容を明らかにする上で欠くことので

きない材料を提供した遺跡である。

5) 東山遺跡

今回、発掘調査した遺跡である。規模の大きな時期不明の集水遺構が発見されている。

縄文時代前期の土坑、早期押型文土器・中期の土器、打製石斧の出土もある。

6) 古山遺跡

諏訪洞溜池から大畑・下り坂の各遺跡を右手に見ながら西に向かって下ると、やがて糠塚遺跡方面に分岐する三差路となる。その分岐点周辺の小高い丘陵地に遺跡はある。縄文時代早期山形押型文・捺糸文・縄文・茅山式、前期関山式、後期称名寺式の土器と石鏃が出土している。

7) 糠塚遺跡

竹入川の左岸、勝弦のほぼ中央にある小高い独立丘陵上にある。

「北小野地区誌」によれば、昭和30年頃、大場磐雄の調査があり多数の土器片とともに石皿・凹石・石棒を採集したという。その後、細井信夫・神沢昌二郎により縄文早期を主体とする多くの遺物が採集されている。縄文時代では早期の山形・楕円・格子目押型文、沈線文・条痕文・捺糸文・縄文施文土器、中期土器、石鏃・石匙・特殊磨石・打製石斧・磨製石斧があり、平安時代では土師器が採集されている。

また、明治4年、工事中に室町時代の古瀬戸瓶子が出土し、当時金井村の戸長をつとめていた青木禎一郎の箱書とともに現在青木文雄宅に保管されている。

勝弦地区の中では、採集遺物も豊富であり、また、各時代にわたっていることからこの地域の中心的な遺跡といえる。

8) 五月ヶ丘遺跡

竹入川の右岸、五月ヶ丘公園の西側斜面にある。縄文時代早期山形・楕円押型文・条痕文・縄文施文土器、石鏃、平安時代土師器甕が採集されている。

9) 血下げ原遺跡

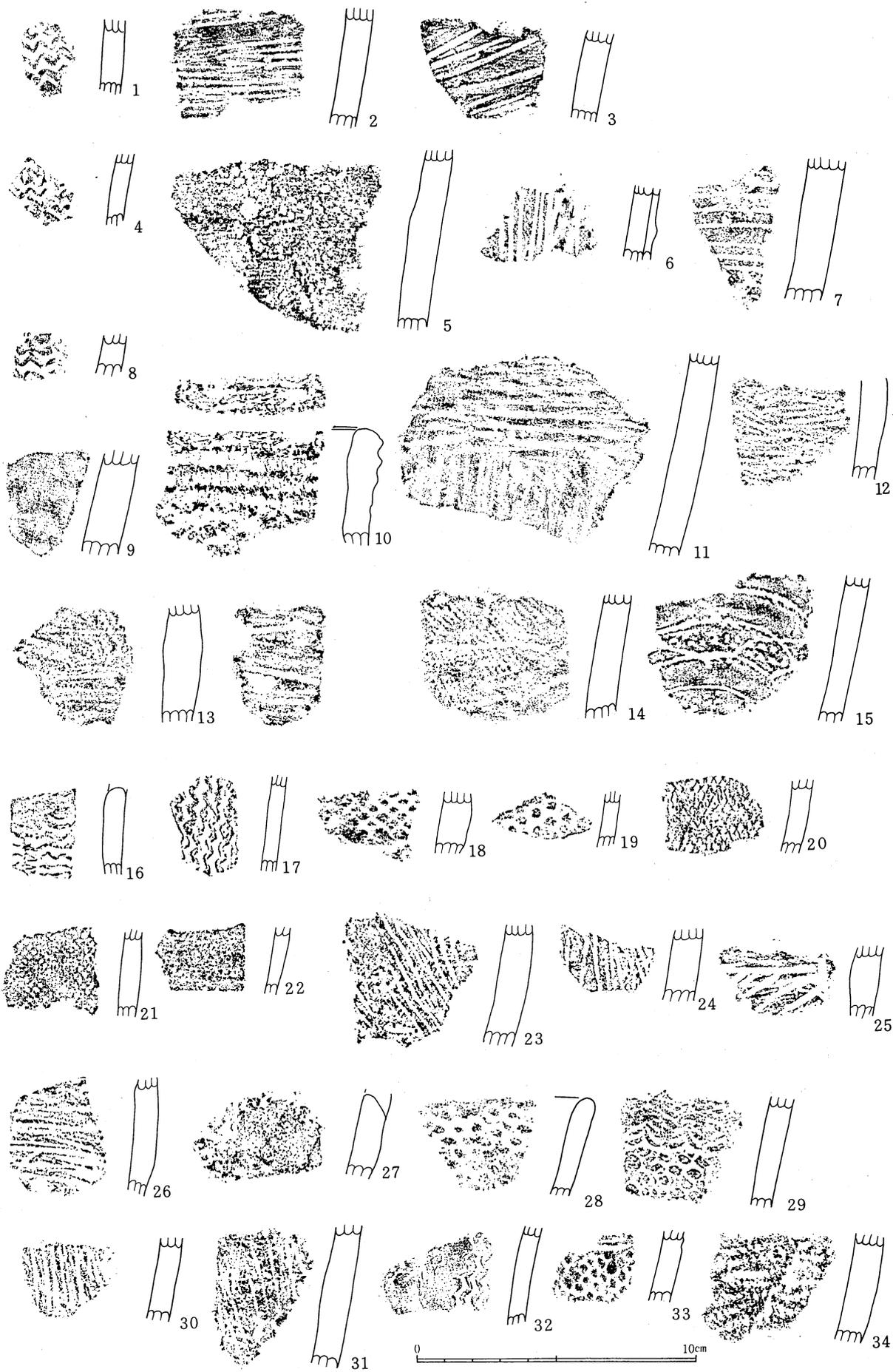
竹入川の右岸、勝弦配水池入口の南斜面にある。縄文時代早期の山形・楕円押型文・条痕文土器、織維土器、飛行機鏃・有茎鏃を含む他種類の石鏃類、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。

10) 秋田荘前遺跡

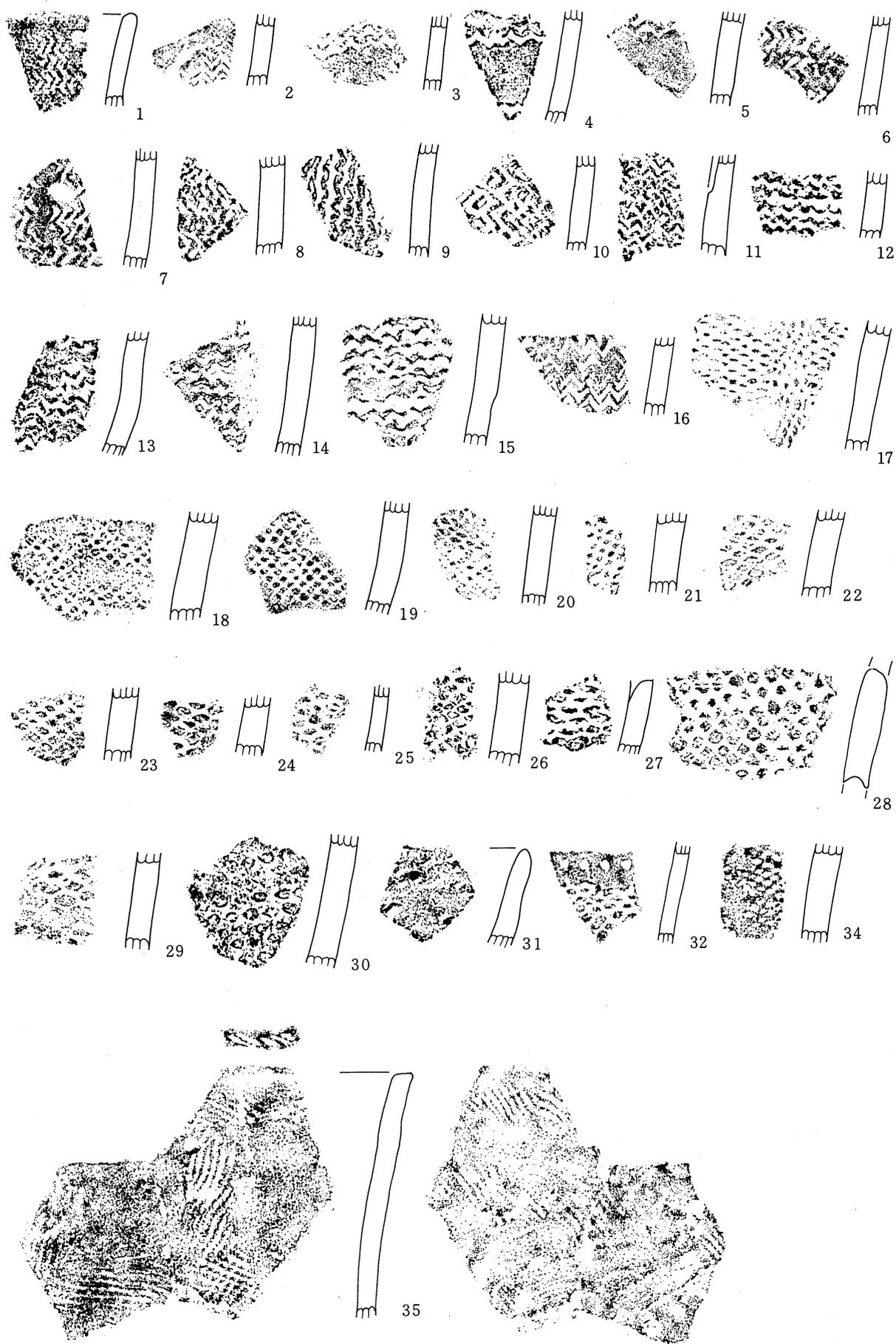
竹入川右岸にある小遺跡で、勝弦地区には珍しい弥生土器が採集されている。

11) 青木平遺跡

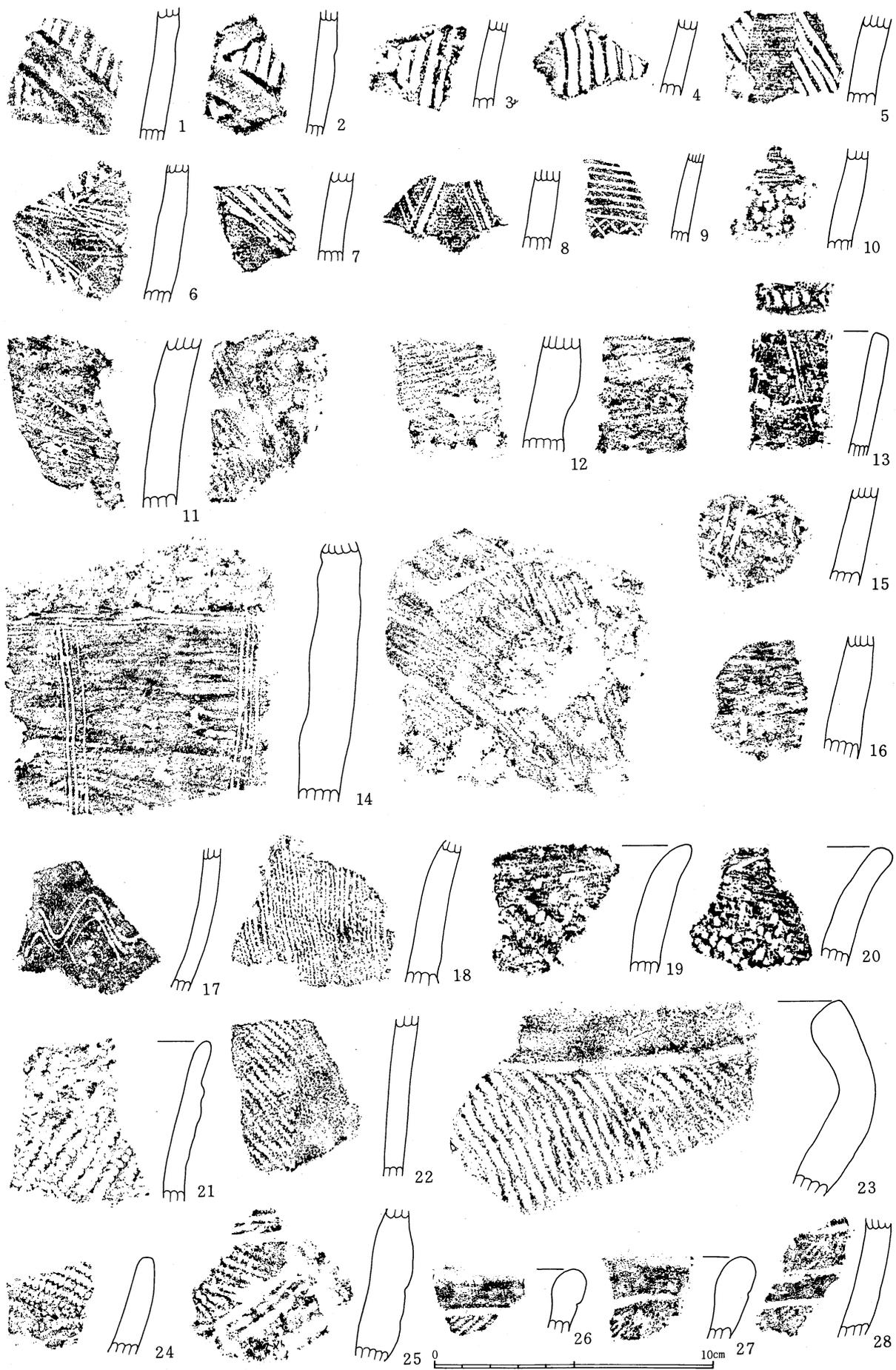
竹入川の左岸で西に向かった緩傾斜地にある。南側は現在水田になっている湿地帯が広がり、東側のやや山寄りには湧水がある。



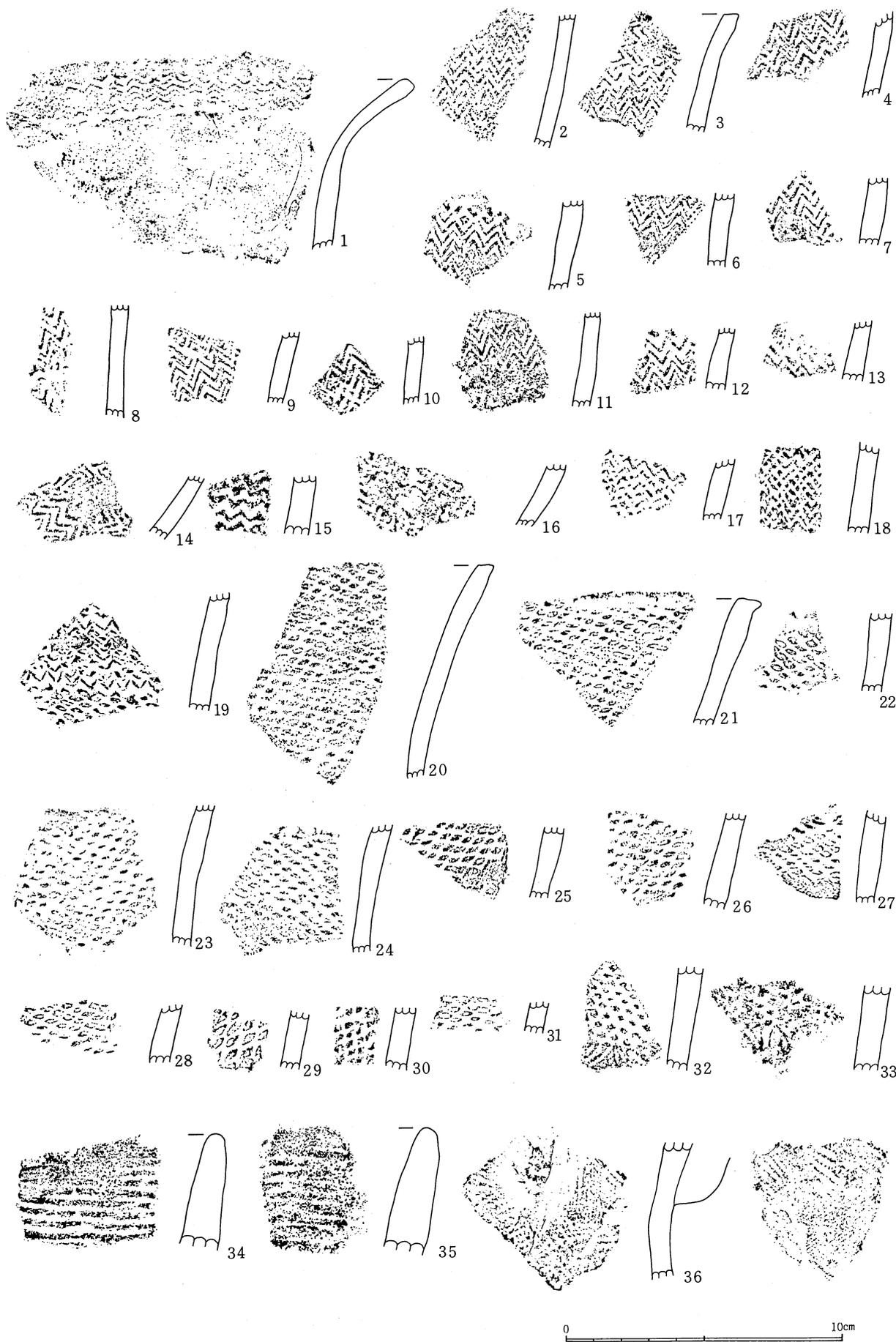
第 36 图 胜弦地区出土土器



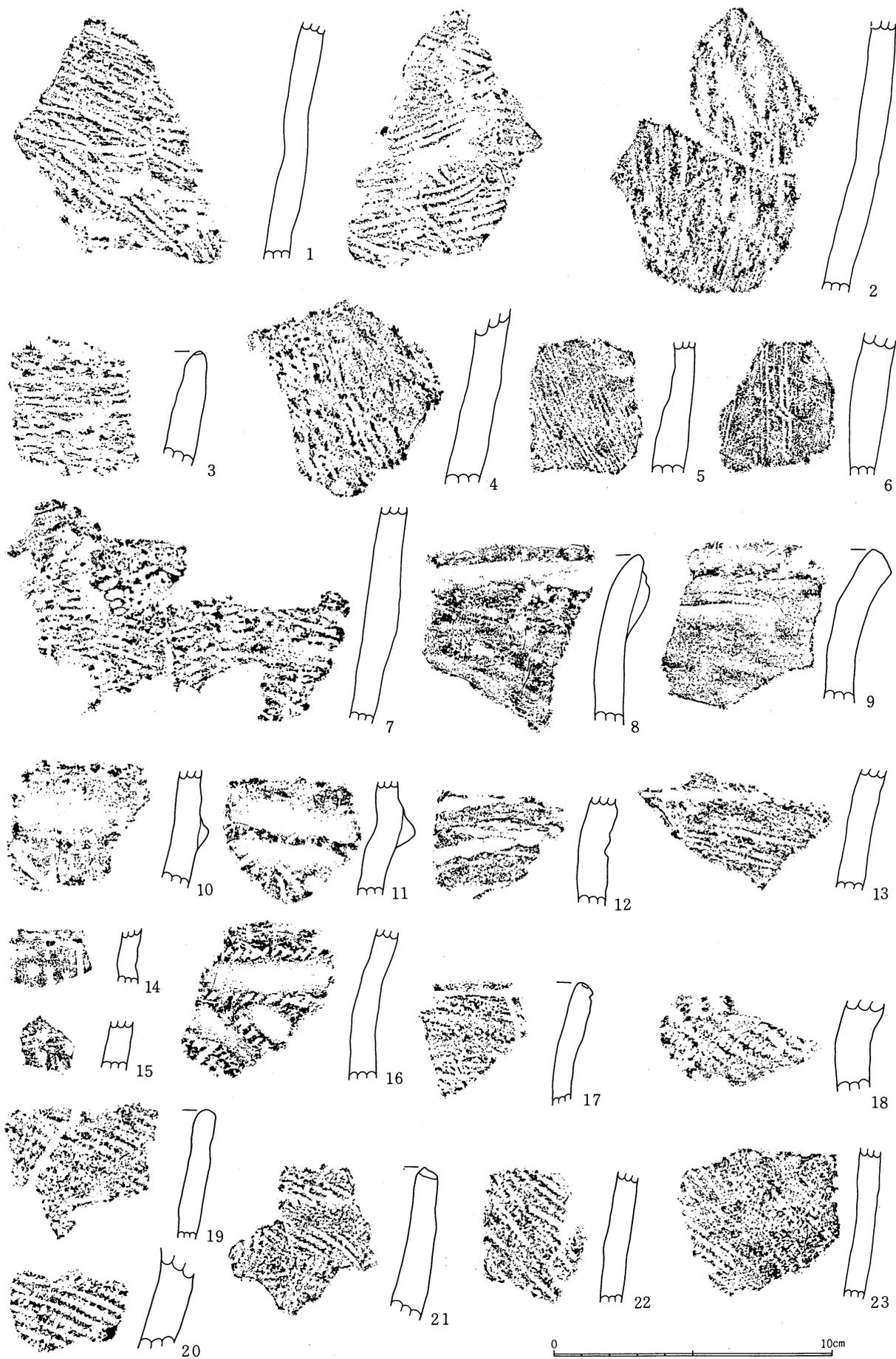
第37图 青木平遺跡出土土器 (I)



第38图 青木平遺跡出土土器 (2)



第39图 石塚遺跡出土土器 (I)



第40图 石塚遺跡出土土器 (2)

細井信夫により多量の遺物が採集されている。縄文時代早期の山形・楕円・格子目押型文・撚糸文・縄文施文土器、鶺鴒島台式、茅山下層式、前期初頭、中期中葉～後葉の土器、有茎鏃を含む石鏃・石匙の石器類、中世内耳土器片がある。

12) 十五社平遺跡

勝弦上部溜池の南側にある。現在の水田とは5mの比高差をもつ。

遺跡の発見は古く、大正末にさかのぼる。八幡一郎は大正13年刊の『諏訪史』第1巻の中で、「十五社平から発見された穀粒状の紋様を付した土器片」と記述し、後年、『日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究(上)』で「ここは曾て大正年間に諏訪史編纂委員今井真樹氏らと訪れ、早期から前期の土器を採集したことがある」と述べている。押型文土器の存在に注目した、全国的にも最も初期の遺跡として学史上重要な位置が与えられている。

今までに採集されている遺物には、縄文時代早期山形・楕円・格子目押型文、撚糸文、三戸式、田戸下層式土器と敲石がある。

13) 石塚遺跡

竹入川の左岸にあり、明治初年に盗掘され、ほとんど原形をとどめてない石塚古墳を中心とした場所にある遺跡である。

昭和27年6月16日、戸沢充則・松沢亜生はこの地域の分布調査を実施した際に本遺跡を発見している。『石器時代2』に掲載された報告には「この日発見した石塚遺跡は、十五社平遺跡にくらべると山の斜面に近く、規模の小さいが、やはり似たような立地をもっている。ここで二十片近い押型文土器を表面採集した。二片の山形文を除き、すべて楕円文をもっていた。他に繊維土器若干を得た。いずれも風化にた小破片であったが有望な押型文遺跡として記憶されよう」と述べている。その後、細井信夫により、樋沢・茅山下層・田戸上層・粕畑・神ノ木・曾利の各型式の土器片、石鏃15、石槍1、石匙2、抉状耳飾1が採集された。

昭和46年にはゴルフ場建設に伴う発掘調査が原嘉藤を団長として市教育委員会により実施された。調査の結果、遺構の発見はなかったが、山形・楕円・格子目押型文、絡条体圧痕文、条痕文土器や石鏃・特殊磨石が得られた。

発掘調査も実施され、以前からの採集品も多いことからこの地区では内容のはっきりした遺跡である。

14) 上の宮水神遺跡

竹入川の上流に豊富に湧出する上の宮湧水がある。遺跡はこの湧水周辺の平坦地にある。

昭和26年、大場磐雄による表面採集調査がおこなわれ、縄文時代早期の尖底土器片、石皿・石匙が採集された。その後、細井信夫により山形・楕円押型文、三戸式併行の沈線文土器と石鏃・石匙が採集されている。

15) チキリヤ遺跡

塩嶺高原別荘地入口のチキリヤ溜池南方の畑地にある。時期不詳の土器片と黒曜石・チャート片が出

土している。

16) 石塚古墳

石塚遺跡のある周辺には今でも巨石が散在している。これが古墳の石室の残骸であるといわれている。郡誌には「既掘、横穴式石室、勝弦新田の耕地中石室あり」との記述があり、また、『北小野地区誌』には「岡屋牧の一部であり、勝弦十五社平に住む豪族の古墳であったとの伝えられている。現在たくさんあった石積みの大石も掘り起こされ運び出されて古墳の原形はなく、発掘された遺物も何一つない状態であるが、かつては古墳末期の円墳であったろうといわれている。」という説明がなされている。

2. 遺跡の分布と変遷

前項で説明してきたように勝弦地区には今までに知られている遺跡は15ヶ所と古墳1基の計16遺跡である。これらの遺跡は勝弦峠の裾にある樋沢・諏訪洞遺跡のグループと竹入川流域に存在する遺跡群とに分けられ、竹入川流域の遺跡は更に右岸と左岸とに分けられる。遺跡の立地では竹入川の右岸に集中する傾向があり、川に面した勝弦山の西麓の比較的なだらかな斜面が生活の場として選択される傾向が強い。



■ 縄文前期 □ 縄文中期 ☆ 弥生 △ 平安

第41図 遺跡分布図(2)

この地域で最も古い人間の生活の痕跡は旧石器時代まで遡ることができる。今回調査された下り坂遺跡出土のナイフ型石器がそれで、たった1点ではあるが1万数千年の昔、人がここを訪れた確実な証拠である。未だ他の北小野地区では旧石器時代の遺物の出土がないことからこの地域の黎明をつけるのはこの下り坂遺跡に足跡を印した人間ということになる。

旧石器時代から縄文時代に入り、しばらく経った早期、この地域は原始・古代の中で最も栄えた時期を迎える。15遺跡中、下り坂・秋田荘前・チキリヤ遺跡を除く全ての遺跡から遺物が出土している。とりわけ早期前半の押型文期の時期は小さな谷合いの小盆地状地形に密集して存在し、この時期の遺跡が集中的に分布する特色ある地域として名高い。押型文期の遺跡がこうした高原状を呈する高所に集中的に存在する例は、他に菅平や野尻湖周辺などがあり、市内棧敷向陽台や柿沢八窪遺跡など比較的低平地に営まれた集落とは異なった集落景観が展開していたといえる。小さなテラス状平坦地に樋沢遺跡で分かったような住居・集石炉によって構成された小集落が営まれ、13ある遺跡のうち幾つかが同時に存在し、互いに関連性をもちながら存立していたものと思われる。生活の安定度は豊富な土器・石器類の出土からもうかがうことができる。押型文期の遺跡構成や文化を一つのまとまりある小地域の中で明らかにする上でまたとない地域である。この地域の早期遺跡が、押型文文化究明発祥の地であり、押型文文化のふるさとと評価される所以である。

早期の後半ではやや遺跡は減るとはいうものの沈線文土器の時期から条痕文土器の時期も他地域に比較してかなりな密集度を示している。

ところが続く前期・中期になると遺跡数は4遺跡となり早期の最盛期の4分の1にまで減少してしまう。しかも、出土する遺物は僅かな土器片のみで、この時期を特徴づける打製石斧・石皿・土偶などはその姿をほとんど見ない。勝弦地区以外の北小野の各地区を含め塩尻の他の地域では早期から次第に遺跡数を増し、中期に至り最も多くの遺跡が残されているのとは対象的なあり方を示している。広大な台地や丘陵に恵まれず、標高の高さも大規模な中期集落の形成には不向きであったものと考えられる。

この標高の高さは稲作を生活の基盤とする次の弥生時代の集落形成に決定的に不利な自然条件であり、わずか1遺跡のみに痕跡が認められるのみである。こうした状態は古墳・奈良時代と続き、この頃の遺跡は全く確認されていない。石塚古墳を支えた人々の集落は果たしてどこにあったのだろうか。

塩尻市の遺跡をみると、縄文時代中期と平安時代の2時期にピークを迎えている。勝弦地区の平安時代の遺跡はわずかに3遺跡が知られているのみで、遺跡数全体の中では決して多いとはいえない。発掘調査された下り坂遺跡では住居が1軒発見されているが、狭隘な南向き斜面を考えると未発見の住居もそれ程多いとは考えられず、数件程度の小集落が営まれていたと考えてよいだろう。田川流域では、低平地に造られた大集落に対して丘陵上に数件程度の小集落が営まれていたことがわかっている。この下り坂遺跡も大集落に対する山間地の小集落という性格を持っていたといえる。住居から出土した鉄滓や大型竈の存在はこうした山間地集落の生産基盤を明らかにする上で興味深い。

中世には、青木平遺跡で内耳土器が、また、糠塚では室町時代の古瀬戸瓶子が発見されており、確実にその痕跡をたどることができる。特に、糠塚出土の瓶子は2個一対で神前に捧げられたといわれており、この地に当時の人々の生活の匂いを濃く残している。しかし、原始・古代に比較し、その考古学的痕跡は微々たるものである。東山遺跡で発見された集水遺構が時代的にどこまで遡るかははっきりしないが、中世以後の人々の構築物であることは間違いなからう。更に古代からはこの地域には岡屋牧や小野牧が置かれたともいわれている。考古学的には顕著な痕跡が認められなくても、この地を活躍の場と定めた人々が確実に存在していたのである。

第Ⅵ章 ま と め

「二月甲寅、(中略) 信濃國言、地震、其聲如雷、一夜間凡十四度、墻屋倒頽、公私共損、(下略)。」
これは『続日本後記』の承和八年の下りです。この内容は、承和八年(841)2月13日に信濃で1夜のうちに14回もの振動を確認した地震が発生し、国や郡衙、寺院といった公共の建物はもとより、民家も倒壊し公私共々大きな被害を受けたといったものです。また、仁和三年(887)と四年にも2年連続して地震が発生し、洪水を伴うなどして未曾有の大被害を与えたという記録も残っています。地震といえは去る1月17日に発生し、関西地区を中心に大きな被害をもたらした阪神大震災は記憶に新しいところです。この阪神大震災では5,000名以上の尊い命が奪われ、建物は倒壊・炎上し、いまなお路頭に迷っている人々が多数いるという非常に悲しむべき出来事でした。被災された方々に哀悼の意を表するとともに、不幸にもお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りいたします。

さて、何故このような地震の話題を取り上げたかということ、今回発掘調査を行った下り坂遺跡において検出された住居跡が9世紀後半のものであり、先に述べた地震が発生した時期に比較的近い時期のものであったからです。下り坂遺跡からは地震の痕跡などは確認されませんでした。文献にみられる記述が実際の発掘調査によって裏付けられる可能性は大いにあり、考古学と文献の両面から研究を推し進めることにより歴史は一層解明されていくことでしょう。

このような下り坂遺跡からは勝弦地区において初めて旧石器時代の遺物が見つかり、勝弦地区の歴史に新たな1ページを刻むことになりました。また、平安時代の住居跡に付随するカマドは、長さ2m以上もある通常の規模をはるかに越えた巨大なもので、その用途などこれからの研究に多くの課題を残すことにもなりました。一方、東山遺跡では遺物が少なかったものの、時期不明ではありますが集水遺構や土坑群が見つっています。

勝弦といいますと、とかく縄文早期押型文期の遺物や遺跡が目につきますが、今回の東山遺跡の集水遺構、下り坂遺跡の平安時代住居跡および巨大カマドなどの発見により、今までとはまた違った視点で遺跡を捉えることができたと思います。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり深いご理解とご協力を賜りました地元関係者の方々ならびに関係諸機関の方々、また記録的な猛暑のなか精力的に発掘調査に携わっていただきました発掘作業参加者の皆様方に心より感謝申し上げます。

写 真 图 版

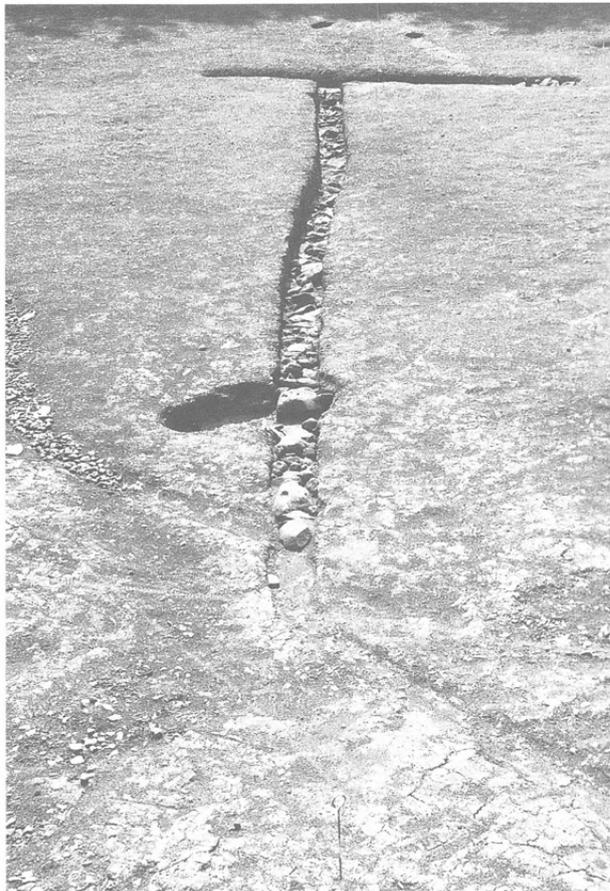
東山遺跡



東山遺跡全景



集水遺構



集水遺構 1



集水遺構 1
調査状況



集水遺構 2 調査状況



縄文時代前期の土坑

(集水遺構により)
切られている

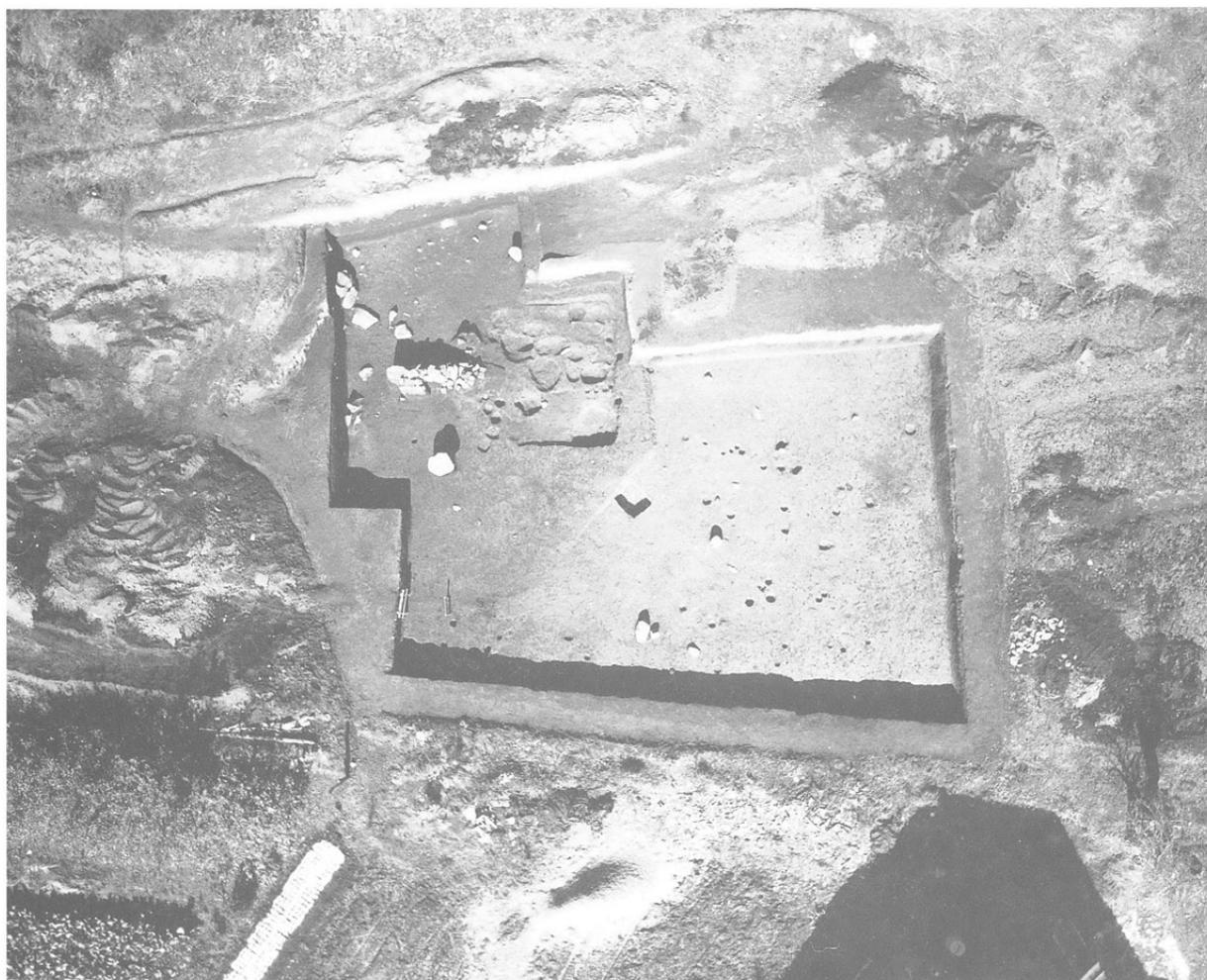


調査風景(1)



調査風景(2)

下り坂遺跡



下り坂遺跡全景

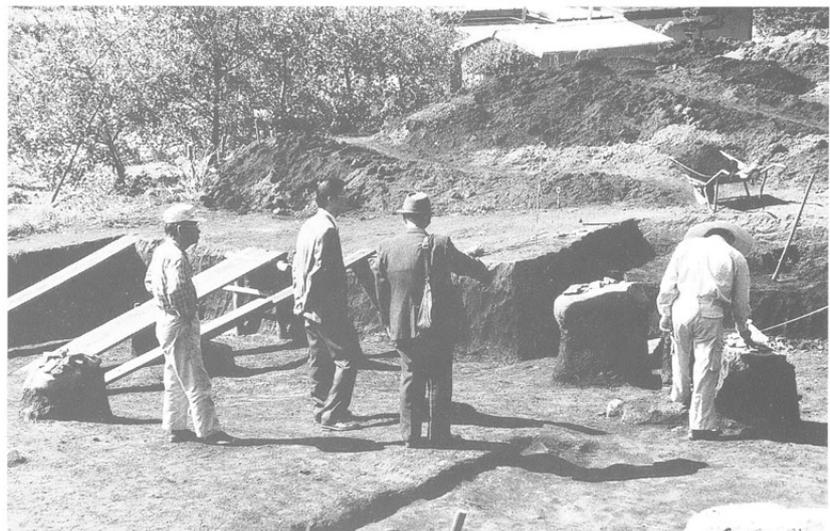


1号住居跡調査状況

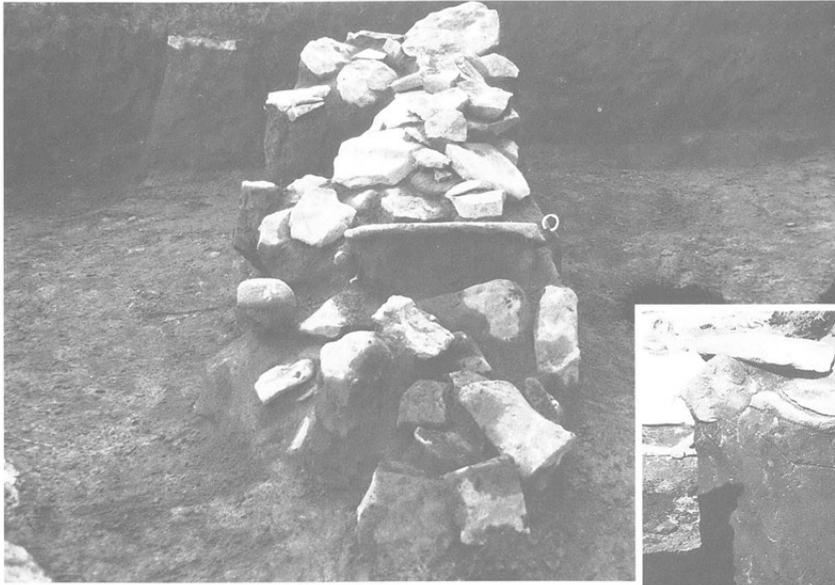
炭化材出土状況



1号住居跡



倉科明正氏指導



Ⅰ 住カマド調査前



Ⅰ 住カマド側面



Ⅰ 住カマド調査状況



Ⅰ 住カマド断面

Ⅰ 住カマド完掘状況



報告書抄録

ふりがな	ひかしやま くだりざか いせき							
書名	東山・下り坂 遺跡							
副書名	～市民いこいの森整備事業に伴う緊急発掘調査報告書～							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小松 学							
編集機関	塩尻市教育委員会							
所在地	〒399-07 長野県塩尻市大門7-3-3				Tel 0263-52-0280			
発行年月日	西暦1995年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひか しや ま 東山	長野県塩尻市 北小野勝弦	20215	228	36° 4' 5"	138° 0' 15"	19940720～ 19940830	2,000	市民いこいの森整備事業に伴う事前調査
くだり ざか 下り坂	長野県塩尻市 北小野勝弦	20215	262	36° 4' 5"	138° 0' 15"	19940819～ 19941028	300	市民いこいの森整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東山	散布地	縄文時代 早期 前期	縄文時代前期 土坑 時期不明 集水遺構 土坑	縄文時代早・前期 土器 平安時代 土師器				
下り坂	集落址	縄文時代 早期 平安時代	平安時代 竪穴住居跡 土坑	旧石器時代 ナイフ形石器 縄文時代早・前期 土器 平安時代 土師器・須恵器 灰釉陶器・黒色土器 鉄鏃・砥石				

東山・下り坂遺跡

～市民いこいの森整備事業に伴う
緊急発掘調査報告書～

印 刷 平成7年3月15日
発 行 平成7年3月20日
発行者 塩尻市教育委員会
印 刷 日本ハイコム株式会社
塩尻市北小野4724
電話 0263-56-2111
